

異世界唯我独尊！～人は1人では生きられないが1人で生きてみたい生き物です～

ユウキング

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日冴えない自分の目の前に現れたもう1人の自分、そいつはなんと別世界からやって来た自分だった!?魔法を極めたもう1人の自分と何の取り柄も無い自分が織り成す異世界?現実世界?アクションバトル!(?)

目次

いつまで経っても大人になれない心

1

いきなりの試練

7

異世界サバイバル生活？

16

異世界チート生活？

34

初めての交渉、初めての冒険者稼業

47

奴隷と主人と倫理観

57

持つべきものは奴隷だった

73

廻りだす運命

91

目標の再確認

106

試行錯誤

124

新たな家族と日常

138

帰郷と邂逅するオルタ

152

嚙矢濫觴

160

いつまで経っても大人になれない心

1. 異世界訪問?

『人は1人では生きられない』という言葉があるように人は現代で1人で生きようとしても、衣食住のどれを取っても誰かしら他人の力を頼らざる得ない。(世捨て人は1人で生きているだろうか)

だけれども厨二病に罹った事がある人なら1度は考えた事があるのではないだろうか。『自分だけの力で世界を生きてみたい』と、そんな事は無理だと大人になった今はつきりと理解しているが時折妄想してしまうのだー最強で万能な自分をー

そんな子供じみた妄想から抜け出せない俺は24歳で絶賛実家でニート中だ。高校卒業後普通に就職して普通に生活していたものの、人とコミュニケーションを取るのが苦手で更には要領が悪いのが拍車をかけ…まあ結局は居心地が悪くなったので自分から会社を辞めたのだ。

そうしてニートになった俺は余った時間を趣味のアニメ鑑賞や漫画に費やし時折アニメ等で良い設定だなと思うと妄想の世界に入っては主人公になってその世界観で無双するという退廃的な日々を繰り返す。今日もそんな日々を繰り返すだろうと思って

いた俺の目の前には、鏡に映し出された自分がいた。

だが俺の目の前には鏡なんて物は無かった、そこは本来リビングの空間であった、のにも関わらず鏡で幾度も見た自分がいたのだ

(なんだ？寝ぼけているのか？いやでも頭はハッキリしているし、なにより空間が割れてる…？なんだこれ。まるで俺がよく妄想するパラレ…)

「正解、パラレルワールドのお前だよ」頭で現状を整理していると考えていた事が見透かされたかのように目の前の「俺」が話し出した。

「どの世界線であつても俺の考える事は同じなんだな」ハハハと楽しそうにしている「俺」そんなもう一人の自分の様子を見て俺は呆ける事しか出来なかつた。そんな俺を見てもう一人の俺は笑いを耐えながら話しかけてくる

「まあ、ちゃんと説明してやるから安心しろよ。今流行りの異世界訪問つてやつだ」

異世界転生なら流行っているが異世界訪問なんて聞いた事も無いし異世界に訪問するのは俺じゃないのか…とガツカリしながらも目の前の出来事に隠しきれないほど自分はワクワクしていた。

?-----?

2. 異世界の俺は有能だった？

「簡単に説明すると俺は異世界、お前の想像するような「剣と魔法と魔物がある世界」

から来た。」ある程度察しがついていたがやはりもう一人の俺は魔法がある世界から来たらしい、しかし何故？そう考えているともう一人の俺が疑問を答えるかのように話し出した。

「お前も俺なら考えた事があるだろ？自分一人の力で生きてみたいと、そして俺はそれを叶える力を持っていた。といっても最初はただの魔法使い見習い、お師匠様や本物の魔法使いに比べればどこにでも——こっちの世界じゃ——

そう、どこにでもいる人間だった、だからこそ俺はいつか誰にも頼らない一人でも何も出来ない誰しもが憧れる様な魔法使いになりたいと思っただ。そこからは独学で頑張ったさ、誰にも頼らないよう誰の手も借りないように魔法を極めるにはどうすれば良いか、考える内に気が付いた俺には頭も手も足も何もかもが足りないってね

だから俺は始めにゴーレム錬金魔法から手を出し始めた、自分の手足の様に動く忠順な駒が欲しくて。試行錯誤を繰り返したさ、誰にも頼らなかつたからな。あの時の俺はまだ頭が固かつたゴーレム錬金魔法なんてピュラーな魔法は専門の魔法使いがいるんだから教えを乞えば無駄な時間を使わずにいたものを…

話が逸れたな、まあゴーレム錬金魔法はなんとか成功したんだ、一時はそれで飯を食っていた時期もある位には。そしてある程度金が金が貯まると次に目指した目標は

自分自身の複製だ、だがこれが難しいのなんの…

この目標を達するには時間が足りない、そう考えた俺は目標を変え不老不死を目指した。そこからはゴーレム錬金魔法を極めたさ必要な媒体を採取する為に作った戦闘兼採取用ゴーレム・錬金魔法の補助をする応用型補助ゴーレム・身の回りの世話を任せる使用人ゴーレム等々：一部は市場に出して資金を集めたりもした、その内俺は国で有数のゴーレム錬金魔法使いとなっていた。

そうしてゴーレムを使って不老不死の研究を続けて数十年、俺はやつと不老不死になる薬を作り出した。といつてもその頃には俺はもう60歳を過ぎていた、その歳で不老不死になった所だと半ば自分自身に呆れていたが俺の心はまだ諦めていなかった、そうして不老不死になった俺は当初の目標だった自分の複製に研究を明け暮れた数十年、百数十年、数百年経ちやつと複製魔法が完成したのだ。

それまでに国が不老不死を嗅ぎつけて狙ってきたり闇社会からの勧誘等色々あったが：今は関係の無い話だ。そうして複製魔法を完成させた俺は不老不死となった自分を媒体にして不老不死の複製体を作り出す事が出来た。

そこからは飛ぶ鳥を落とす勢いで魔法を極めたさ、なんせ同じ目標の同じ思考をした自分がいくらでも作り出せるんだからな！最初は警戒したさ、いくら自分自身とはいえ本当に信頼しているのか？オリジナルである存在を邪魔に思わないのか？と、だがまあ

もし自分が複製体だったとしても別にオリジナルを攻撃する訳もしないし、複製体も同じ考えだった。

そして情報共有出来る魔法を開発したり膨大な量の情報を処理するだけの自分達や魔法以外の剣を極める自分達や狩りや農業、国を治める為の知識を学ぶ自分達等々本当に様々な分野に手を伸ばし自分だけの国が作れる程の人数や知識、武力が揃った。その頃には自分達の大半は地下に国を興し、そこで様々な分野を極めさせていた。

そんなある日、宇宙研究をしていた複製体の俺が面白い事を俺達全員に情報共有魔法を使って教えてくれた

『宇宙を研究していたら面白い仮説を1つ思いついた、この世界だけでなく色々な、それこそ俺達がやっている様な魔法を極める俺や剣を極める俺、色々な方向性を伸びた俺達がいるように色々な方向性を持った世界が複数あるんじゃないか?』

衝撃だったよ、そんな事考えた事も無かったからな。だがそれに興味を持った俺達は魔法や物理学その他の力を合わせて並行世界の証明に尽力したよ、そしてそれが証明したと共に並行世界への行き来出来る魔法が完成したんだ。色々な世界に自分を派遣したさ、魔物に支配されている世界・魔物が存在せずに人間同士で争っている世界・そして魔物も魔法も存在しない、この世界”

色々な世界で研究する事は沢山あった、この世界だと魔法が無い事で発達した科

学という分野に興味を持って俺達はやって来た。ここまでは理解出来たか？」

そういうと満足したかのようにもう1人の俺は口を閉じた。正直話が長すぎでほとんども聞き流してしまった俺は正直に言う

「簡単に言うとか？」

ハア…ともう1人の俺は呆れた顔でため息をついた。

いきなりの試練

3. 自問自答

分かりやすく改めて説明してもらい俺は深いため息をついた「なあくるほどねえ」
まさか違う世界の俺がこんなにも努力家で優秀だったとは…何事にもバランスがあ
り、無能な俺がいるなら有能な俺もいるってか？なら仕方ないよな、うん。

「それで？この世界線で科学を学びに来たお前、いや俺…だあー！ややこしいな！！お前
向こうでの名前は！あとお前は態々なんで俺に逢いに来たんだ？」

「おお、名乗ってなかったな、俺の名はアルコーヴァ・カツフェだ、そりやお前こつちの
世界に来たんだからこつちの俺に挨拶するのが礼儀だろ」

礼儀なのか？普通は世界を渡る事はないから礼儀も何もない気がするが…ともかく

「ほんとにそれだけなのか？」

「それだけだ、そうだお前、えーつと名前は…」

「日野 優ひの まいがファーストネームな」

「そうか優、俺の名前は長いからな、カフと呼んでくれ」

「カフ？」

「愛称ってやつだよ」

「なるほどな。それでカフ、なんか俺に質問しようとしてなかったか？」

「ああ、そうそう。優は異世界系の小説とか好きか？」

「こいつ、さつきから思ったけどなんでこっちの世界に詳しいんだ：下調べしたのか？
「少し読んだりするけど：カフはなんでそんなに詳しいんだよ」

「あーなに、下調べとしてこっちの情報を調査用ゴーレムを送り込んだり魔法で調べてたからな、難しい事じゃないさ」

「こいつ、マジで優秀だな…」

「それで異世界系小説がどうしたよ」

「いやあれは面白いな！魔法が無い世界なのにあんなに魔法で色々考えたり科学を使つて無双したり：娯楽として読んでいたが実際いくつかのアイデアを得た作品もあったぞー！」

マジか：異世界系の小説家もすげえな…

「それでなんだが優は異世界に行つたら何かしたいとか妄想はしてないのか？何でもいいで、もしかしたら思わぬ収穫になるからな！」

なるほどね、それで訪ねてきたのか。

「うーん、そうだな。基本俺は小説内の能力を俺ならこうするなって感じで想像するだ

けだから自分で何かを考えたりはしないかな…あつてもずっと思ってたことはあるぞ」
「お？なんだなんだ言ってみてくれ」

「大体小説の主人公つてチートな能力貰つてばつかで苦手なんだよな、自分の能力は無いし現代科学の力を自分の力みたいな顔でドヤ顔したり、殺しに来た敵を許して何なら仲間にしたり、ハーレム作ったり…」

最後のはただの嫉妬だ

「そんな主人公ばかりで俺なら能力を使わず自分の力で生きてやりたいって思ってたな」

「ほう…?」

カフの目つきが鋭くなり声のトーンが落ちた

「ならやってみるか? 何の能力も貰わずに異世界生活を」

そういうとカフは徐ろに立ち上がると魔法を行使した

「は? いやいや想像はするけど今の俺じや異世界に行つてもすぐに死ぬって分かつてるから! 現代人でニートな俺の貧弱さ舐めん!!」

威張る事ではないだろう

「そうか? その割にはほんの少し筋肉が付いているし大丈夫だろ (笑)」

鼻で笑いながら適当なこと言いやがる…筋肉って言ったって運動不足にならない為

に家で少し筋トレしてるだけだ。とてもサバイバルで生き残れるようなものではない

「心配するな、ナイフ位はくれてやる。お前も少し異世界つてやつを楽しんできたらどうよ」

そういうとカフは魔法を発動させ俺を異世界に飛ばそうとする

「おい！空間にヒビ入ってる!!マジか！マジで飛ばすのか!?!絶対許さんからなあああ
!!!」

そう叫びながら俺は空間の狭間から異世界に飛ばされた…

?—————?

4. 自業自得?

「はあ…マジでアイツやりやがった…異世界でどうしろってんだ、ナイフはありがたいけど…」

どうやら飛ばされた先は森のようだ、人が入れない大きさの空間の狭間から服やら靴やら手紙が飛んできた。

『優へ、魔物も魔法も比較的弱い世界に飛ばしたのでどうか気軽にサバイバル生活を楽しんでほしい、俺のいた世界でもないから保証はしないが。そこで生きていけば野生の勘も養えるだろうし男なら強くなりたいたいだろう?まあ1ヶ月もすれば回収してやるから安心しろよな。親愛なるもう1人の自分カフより』

あいつ無駄なお節介すぎんか…それとも心でも読めるんか…心の中で異世界に飛ばしてくれないかな…ってワクワクしていたのがバレたのかと思ひ、ドキドキしながらカフへ苦情やら感謝やら複雑な気持ちを向けつついそいそと服を着替えるのであった。

「んで、どうしようサバイバル術なんてしらんし、何が食べられるかも知らないから早速詰んでないか？ やつぱりチート能力貰わないと人は無力だよなあ」とボヤきながら俺は森を歩いていた

「とりあえず飲み水確保の為に川目指すか！」と歩き続けたものの一行に景色が変わらずそのまま夜になった、生き物にも出会わずにいた俺は無警戒のまま草むらに身を預け眠った。

二日目、ナイフを振り回しながら歩き続けていると遠くに猪のような生き物が何かを食べていた、幸運な事に食事中だからか、こつちにまだ気づいてる様子はない。昨日は何も食べずにいたのであいつを狩ろうとにじみよる

(野生動物なんて初めて狩るからこれが正攻法か分からんが、しゃがみながら少しずつ近付くしかないか…)

そんな事を考えながら草むらに入り近付いていき猪との距離が1m程度になった時、猪も辺りを警戒しだした

気付かれたかと焦ったが気付いてる様子はなく、生物の気配を感じたから辺りを見渡

した程度だろう。緊張で手が震えながら俺は猪に襲いかかった

「ツ!?ピギイ!」

猪の首にナイフを突き刺しながら振り払われないように猪の体にしがみつくと、深く刺さつてないからか暴れる猪に何度も何度もナイフを突き刺す

「この野郎!刺されてるのに元氣よすぎだろ!!このっ!このっ!」

1度も反撃を受けなかったおかげで猪と俺の攻防は10分程度で終わった。

「はああああ…めっちゃ疲れたしアドレナリンどばどばで手が震えてるわ…」そう言いながら震えてる手をほぐす

「命の奪い合いはゲームでもよくあるし、やっぱ人は争うのが好きだよなあ、だってこんな…気持ちいいし」

初めて奪った命を前に謎の高揚感が全身を包んでいた。

「にしてもこれ…どうやって解体して食べようか…ていうか火をおこさないと駄目じゃん…」

せいぜい魚程度しか捌いた事の無い現代っ子の俺は猪を解体する事の前に火をおこす所から出来ずに途方に暮れていた。

「はあ…はあ…テレビとかで木の棒クルクルしたら火がついてたけど、初心者じゃそう簡単にいかないよなあ」

火をおこそうとして1時間、辺りは暗くなり始め手元が見えなくなってきたので火おこしは諦めた。

「まあ新鮮だし少しぐらいならよく噛んで食べれば大丈夫だろ」

そんな軽い気持ちで猪の肉をナイフで削ぎ、食べる。

「うっ…美味くない…血抜きとかしなかつたからか？まあ吐くほど不味いつて訳じゃないしお腹減ってるし食べるか…」

初めての狩りを思い出しながら次はああしよう、次はこうしようと言いつつ猪肉を食べていた。

深夜

「お腹いってえ…」

見事に腹痛になり目を覚ました。

悶えながら目を開けると月明かりはあり真つ暗では無い為何かが動くのが見えた。狼だ、猪肉の死肉を5匹程度で食っていた。

(ヤバイヤバイヤバイ)

脳が一気に目を覚まし、腹痛に悶えながら狼達から離れようとするが物音で気付かされた。

「！！！！」

(あくこれ終わった)

狼達が一斉に振り返りこちらを見た、俺は既に諦観しながらもフラフラと立ち上がり、ナイフを構える。

「クソがよオ……一匹位道連れにしてやるからさつきと掛かってこいよ……」

声は弱々しいが覚悟は決まっていた。

「ガウ！」

狼達が3匹纏めて一斉に襲いかかってきて両足に1匹ずつ、首を狙って1匹が飛びついてきた。

「クソが！」

両足に噛み付いてきた狼達を無視して俺は首を狙ってきた狼に対し全力で対応した、首を噛まれる前にナイフを持っていない方の腕を噛ませ、その隙にナイフで狼の目を狙って思い切り刺し、押し込む。

「ギャーン！」

狼が離れようとするがもう遅い、火事場の馬鹿力かナイフは狼の目を突き抜け脳天を刺した。噛まれていた腕は離されたが骨が折れたのだろう力が入らず、激痛が走る。

未だに足に狼が噛み付き血が出ているからか、意識が朦朧としてきた。弱肉強食、俺が猪を狩った様に狼が俺を狩る。既に覚悟はしていたが痛いものは痛いし死の直前に

なるとやはり怖い。

（ああ……これで死ぬのかニートになってからいつ死んでもいいと思ってたけど最後に楽しい思いができたな……）

そんな事を思いながら倒れて目の前が暗くなっていく。

《主の危機を感知、ハードサバイバルモード終了、ここからは異世界チートモードを始めます》

意識が失う前そんな声が聞こえ、1本のナイフが空中に浮いていた。

異世界サバイバル生活？

5. カフからの饞別

目を覚ますと俺は生きていた、昨日狼達に襲われたのは夢だったのか？ 体を見渡すが怪我がない、しかし服はボロボロだったので昨日のことは確かに現実だったのだ。

《おはようございませう優様》

そんな声が聞こえ、声ができる方に目を向けるとそこにはカフから貰ったナイフが俺の目の前で浮いていた。

「カフか？」

《はい、カフ様に創造していただいた人工知能搭載ナイフ型ゴーレムです。》

マジかよ、カフ最高かよ！

俺は思わず泣きそうになったが、ここに飛ばしてきたのもあいつだったなと思えば涙は引っ込んだ。

「えっと、ナイフちゃん？ の名前とか色々教えて欲しいんだけど、女性…であつてる？」
ナイフから発せられる声が可愛らしい事で俺は女性と思いきや、こんだがナイフに性別なんてないだろう。

《私は女性型の声で発声しますが性別はないかと、カフ様曰く『冒険のパートナーは美少女だよな!』と》

マジかよ、カフ最高だよ!!

《カフ様から優様の生命危機による自立行動の許可、優様のサポートを任せられており、周辺探査・地図作成・物質操作・火炎魔法・水氷魔法・雷電魔法・烈風魔法・鉱石魔法・無属性魔法・回復魔法・補助魔法を授けられています。》

おお!マジか、一気にヌルゲーになった気がするが魔法を使えるのは良い事だ!!

《昨晚瀕死になっていた優様を回復魔法で回復した後、攻撃魔法にて狼達を追い払いました。カフ様にはなるべく優様のサポートに徹するように仰せられていますのでご了承ください。》

「分かった、むしろ全然良い!昨日は助けてくれてありがとう。それで、えつと…名前は付けていいの?」

《はい、名前は優様から付けていただく様カフ様より仰せられています。》

うーん、困った。悲しいが俺にはネーミングセンスが無い、だが名前がないと困るし非常に困った。

(ナイフなんてFPSで聞いたことがあるスペツナズナイフ位しか知らないぞ…:スベ…ツナ…ナズ…あつ)

「ナズナってどうだ？ スペツナズナイフの間を取ってみたんだが…花にもナズナってあったし女性っぽくないか？」

《別に私はスペツナズナイフでは無いのですが…それとナズナは花ではなく草の名称ですね。》

おお！流石人工知能さん、博識だ。

「草か…駄目だったか？」

《いえ、確かに女性らしくて可愛らしいと思います。ありがとうございます優様》
良かった気に入って貰ったみたいだ。

《それでは優様、私を手を持ち “能力値閲覧” と唱えて下さい。》

お！自分のステータスが見れるありきたりな魔法きた!!

「能力値閲覧！」

【日野優ひのまさる】

L v. 3

体力：20

筋力：10

素早さ：10

知力：20

器用さ：10

魔力：0

※軽度の鬱症状による状態異常（全能力－5）

はえ〜平均が分からないけど、まあ現代人だしこんなもんだろうな、あとやっぱ魔力は無いか、残念。で：最後の欄だが：

「え？俺って鬱なの?？」

《そうみたいですネ、この『能力値閲覧』は補助魔法による優様の身体を解析し、生物の平均能力値から出した数値と肉体的・精神的な身体の異常を算出し分かりやすく表示させたものですので。》

「へえ〜ニート生活してからいつ死んでも良いやとは思ってたけど鬱だったのかあ、実感無いな…」

自覚が無かった俺は思わずショックを受けた。

《それと全魔法共通ですが魔法使用時に発声はいりません、心の中で唱えるだけで発動できます。》

まさかの無詠唱発動可能！一々口に出すの恥ずかしいから助かるな、え？なら何でさつき唱えさせたの?？」

《カフ様曰く『異世界物の定番』というものらしいです。》

「ああ、そう…：ていうか今声に出てた？心読めるの？」

《顔に出ていましたので。》

流石ナズナさん、さすナさんだ。

《優様は魔力が無い為魔法は使えませんが、私の内包する魔力と授けられた魔法を用いる事で私を通して魔法を放つ事が出来ます。能力値閲覧は補助魔法の応用です、他にも補助魔法の1つで鑑定があります。》

説明が丁寧かつ有能すぎて、もうナズナさん手放せないな。そう思いつつ俺は鑑定でナズナの性能を調べた。

【人工知能搭載ナイフ型ゴーレム（ナズナ）】

等級：秘宝

耐久力：100000 / 100000

攻撃力：1000 / 100000

魔力：100000 / 100000

スキル： 周辺探査（IX）・地図作成（IX）

物質操作（IX）

火炎魔法（IX）・水氷魔法（IX）・雷電魔法（IX）

烈風魔法 (IX) ・ 鉱石魔法 (IX) ・ 無属性魔法 (IX)

回復魔法 (IX) ・ 補助魔法 (IX) ・ 自動修復 (IX)

自動魔力回復 (IX)

見た目ただのナイフなのに秘宝なんだ…え？数値5桁ってヤバくね？これヤバイよな？魔法付きすぎだし…あとスキルの後ろのマーク何？ローマ数字の9か？自動修復とか自動魔力回復って実質耐久力と魔力無限じゃん、カフのやつさらつとなんてもんくれたんだ、素人が持っていていいものじゃないでしょ…

「ナズナ、お前の等級とか、スキルの後ろに付いてるIXって数字は何なんだ？」

《等級は基本的の下から『粗悪・普通・高級・希少・異質・固有・逸話・遺産・伝説・秘宝』があり、内包する魔力が100万を越えると『夢幻』1000万で『神話』1億で世界級になります。更にその上に『天体・銀河・宇宙』級がありますが今は説明を省きます。》

《そして魔法には9段階あり1〜3が初級、4〜6が中級、7〜9が上級という認識で大丈夫です。9の上もありますますが基本的に9位階魔法を使える人が2人以上で扱う儀式魔法ですので説明は省きます。》

「魔法は9段階で分かりやすいけど武具の等級はちょっとややこしいな…」

そう言いつつ小説でよく見る等級はすんなり頭に入ってくる

《それでは説明もそこそこに早速実戦を始めましょう。周辺探査スキルによるとここから南東5km先に集団戦闘が行われています。》

ナズナがそう言うのと目の前にホログラムの様に地図が出てきた、未知の土地に放り出されて改めて思うけど地図って便利だなあ。

「その集団戦闘に行つて何するんだ？漁夫の利か？」

《いいえ、漁夫の利とはいえ戦闘の素人である優様が奇襲をしたとしても返り討ちに合うだけでしょう。ですので気付かれないよう近づきこの世界の戦闘水準の確認、優様は戦いの基礎を学べる機会になるのではないかと。》

なるほどな一石二鳥になるし、さすナさんだ。

「了解、早速向かってみよう！」

そう言う俺は戦闘が行われている場所へ向かった。

?—————?

6. 初めての遭遇、初めての戦闘

キーン！キキーン！！

集団戦闘が行われている場所へ近づくと金属同士がぶつかり合う剣戟の音が聞こえる。

「あれは…人と…ゴブリン?!」

初めて異世界らしい生き物を見て興奮する。一目でゴブリンと分かる様な小さく不健康な体、しかし体の色は緑ではなく殆ど人と同じような土色だった。

《そうですね、人種と亜人種で間違いないと思います。人の方は前衛2人に弓使い1人と魔法使い1人、基本的なパーティ構成だと思えます。》

確かにいかにもって感じがするな

「んでゴブリンが5体、錆びれた包丁や棍棒を持ってて、こっちもいかにもって感じだな。」

《いいえ、茂みにゴブリンアーチャーが2体隠れていますので計7体です。》

マジか全然気付かなかった、悔しいな。

「ナズナ、俺も周辺探査使えるか?」

《勿論です、周辺探査と補助魔法の鑑定を併用する事で遠くの生物も鑑定する事が出来ませう。》

なるほどな、では早速

『周辺探査&鑑定!』

【ガリウス】

L v. 10 : 戦士

体力 : 35

筋力：45

素早さ：20

知力：20

器用さ：15

魔力：10

スキル：格闘術(Ⅲ)・剣術(Ⅲ)・弓術(Ⅰ)

【ユリウス】

L v. 9：密偵

体力：25

筋力：20

素早さ：35

知力：30

器用さ：25

魔力：20

スキル：罨師(Ⅲ)・短剣術(Ⅱ)・土魔法(Ⅰ)・格闘術(Ⅰ)

【サーシャ】

L v. 8：弓使い

体力：20

筋力：20

素早さ：25

知力：25

器用さ：30

魔力：20

スキル：弓術（Ⅲ）・周辺探査（Ⅲ）・風魔法（Ⅱ）・気配察知（Ⅱ）

【ミレーヌ】

Lv. 12：魔法使い

体力：20

筋力：20

素早さ：20

知力：35

器用さ：30

魔力：40

スキル：火魔法（Ⅲ）・水魔法（Ⅲ）・風魔法（Ⅱ）・回復魔法（Ⅱ）・補助魔法（Ⅱ）

【ゴブリン】

Lv. 7 : ファイター

体力 : 25

筋力 : 25

素早さ : 15

知力 : 5

器用さ : 5

魔力 : 0

スキル : 強殴打 (II) ・ 強斬撃 (II)

【ゴブリン】

Lv. 9 : アーチャー

体力 : 25

筋力 : 25

素早さ : 20

知力 : 5

器用さ : 10

魔力 : 0

スキル : 強射出 (II) ・ 強蹴り (I)

「おー！4人とゴブリン達の居場所がはつきり分かるようになったし能力値も見える！！ゴブリンの方は複数いるけど大体1〜2しか能力値は変わらないな、それにしても…」

「ナズナ、剣術とかと、強斬撃って何が違うんだ？」

《系列は同じですが数が違います、同じ系列の技が2つ以上になると併合され術として纏められます。今の間に優様、失礼します。》

なるほどなあ〜と聞いているとナズナが手元から離れ魔法と使った

リザレクシオン ディレイリザレクシオン リスボーンリザレクシオン エマーゼンシーリザレクシオン
《蘇生・遅延蘇生・定位置蘇生・緊急蘇生》

ナズナが俺に向けて4つ位魔法放ってきた

「ナズナ？俺に何使ったの?？」

《身の安全を確保する為に蘇生魔法を4つ程かけました、ご安心ください。》

マジ怖かった、何するか言って欲しかったわ…

「蘇生魔法だけ？なんか能力値上げるバフとかないの？」

《ありますが、多少能力値が上がった所で中途半端に生き長らえて苦しいだけかと。それとバフはレベルが上がった場合に身体能力向上が感じにくくなるのでオススメ致しません。》

確かに、無駄に苦しめられるのも嫌だし強くなつたって感じにくいのも嫌だな…

「だったらせめて痛覚を感じにくくなる魔法とか怖さに耐性付ける魔法とかかけて欲しいな」

《了解しました、痛覚鈍化（Ⅲ）・恐怖耐性（Ⅲ）・沈着冷静（Ⅲ）》

「ありがと、にしても何で3なの？3までしかないのか？あと最後の魔法はなに？」

《いえ、勿論各魔法は9段階までありますが強力過ぎるため優様の成長に繋がらないかと。そして最後の沈着冷静（Ⅲ）は物事を冷静に判断する事が出来る魔法です。岡目八目な優様には合っているかと。》

なるほど俺の為ね、あと何か最後軽くデイスられて無かった？意味が分からなかったけど悪口つぼかった気が：帰ったら調べておこう。にしても：

「後衛の女の子達可愛いなあ、やっぱ漁夫の利で炎魔法とか使って襲うか？」ゲスイ発言を漏らす。

《優様：…なるべく優様の意志を尊重しますがお勧めは致しません、優様は倫理観が無いのですか？》

ゴレムに引かれてしまった：軽い冗談のつもりだったが。

「ちよつとした冗談だよ、勿論倫理観はちゃんとあるよ。自分がされて嫌な事はしないし、襲いたくてもちゃんと我慢出来る。」

自制心が高いなんて俺は偉いんだ。

《襲いたいのには本心なのですね…》

「ナズナ何か言った？」

《いえ、何も。》

ナズナが独り言呟いてたけど聞き取れなかったので気にしない、そんな雑談をしているとゴブリンと冒険者達の戦闘が終わりそうだった。

「ゴブリンファイターはあらかた片付いたみたいだな、あつゴブリンアーチャーがガリウスに矢を放ったぞ。」

ナズナの周辺探査スキルのおかげでゴブリンと冒険者達の動きが丸わかりになってるおかげで戦況が冷静に判断できる。ゴブリンアーチャーが放った矢はガリウスに当たらず半透明の障壁の様な物に妨げられた、魔法使いのスキルだろう。

攻撃が防がれたゴブリン達が驚いている間に弓使いがゴブリンを仕留めた。多分弓使いの周辺探査スキルで最初から隠れている事がバレていたのだろう。

「苦もなく勝ったみたいだな、それでも浮かれずに周辺を警戒してて流石プロって感じだな。」

ゴブリンに勝った4人組は周りを警戒しつつ何かを話し合ってるみたいだ、そして話し合いが終わると…

ヒュン、ズドン！

俺の隠れていた木に矢が刺さった、距離が離れていると油断していたが弓使いは周辺探査スキルがあるのでバレていたのだろう。うっかりしていた

「ЪШХУЭ!ЖРЙЗКИК!!」

何か話しているみたいだが聞き取れなかった、異世界でも言葉が伝わるなんてご都合展開は無いみたいだ。

「困ったな、出ていこうにも言語が分からないなら会話にならないし、でも出ていかない訳にもいかないし、そもそもまともに人と話せるか自信が無い…」

ここでまた1つ異世界物の気になる点が出てきた、転移前や転生前に陰キャやオタクだったやつが異世界に来てあんなにハキハキ話せるのはおかしくないか。ハキハキ話せるなら元の世界でも陽キャに混じってそうだよな…とかどうでもいい事を考えているとナズナが提案してきた。

《優様、補助魔法で言語翻訳がありますので問題ないかと。》

ナズナほんと有能、あと何気に補助魔法も優秀だな異世界に必須だわ。

「ナズナありがと助かる、言語ランゲージトランスレーション翻訳」

「ちよつと聞こえてるでしょ!そこにいるのは分かっているんだから早く出てきなさい!!」

おお!弓使いは言葉が理解出来る!ちよつと感動…してる場合じゃないな、覚悟を決

めるか。

両手を挙げながら俺は冒険者達の前に姿を現した。

「あなた何者？どうして私達を偵察していたの？」

「すみません、自分は……えーつと旅人なんですが他人の戦闘なんて滅多に見る機会が無いですし護身の参考になるかなと思ひ観察させてもらってました。」

「どうだろう、何者が答えるのは詰まっちゃったがスラスラ話せた方ではないだろうか、話すのは得意という訳でも無いが苦手でも無い、普通に受け答え位は出来るレベルだ。」

すると弓使いは魔法使いの方を振り向き何かを促した。

「……嘘は言っていない、能力値も普通……いや旅人にしては低すぎるくらい。」

「そうね、敵意は感じないし本当にたまたま遭遇した感じね。」

良かった、なんとか納得してもらえたようだ。こちらの疑いが晴れると

戦士のガリウスと密偵のユリウスがゴブリンの耳をナイフで切りながら話しかけてきた。

「驚かせて悪かったな、俺はガリウス。こっちが密偵のユリウスで弓使いがサーシャ、魔法使いがミレーヌだ。」

「俺はひん……優です、マサルって呼んで下さい。それはゴブリンの討伐証明として耳を

切っているの?」

「ああそうだ、ゴブリンは素材に出来る所が無いからな。とはいえ人間に害をなすから討伐すると報酬が貰えるんだ。」

はえくよくある話だ。作業みたいに耳切ってるけど結構あれもグロいよな：そんな事を考えていると

「マサル、あなたレベルが低いのによく森の中で生き延びているね隠れるのが得意なの?」

魔法使いに質問されてしまった、そりやそうだよな多分村人レベルの弱さなのに森の中で生きているんだもんな。

「そうですね、なるべく生き物と出会わないように気を付けていました。」

「マサルく敬語なんて使わなくてもいいわよ、私達冒険者なんだし寧ろむしろ痒いわ」

弓使いのサーシャがラフに話してくれる

「ありがとサーシャ、でも人と話す時は基本誰にでも敬語を使ってるから自分としてはこっちの方が楽なんですけどね。」

これは本当だ、寧ろ話す人毎に話し方を変える方がめんどくさい。

「そうなの、ごめんね変な事言ってる。」

「いやいや、むしろ気を使ってくれてありがと。」

そんな会話をしていると

「おーい、討伐証明物は取り終えたから帰るぞー」

ガリウスが呼びかけてくる

「街に戻るんですか？」

「ああ、丁度依頼終わりの帰路でゴブリンと出会ったからなマサルも一緒に行くか？」

渡りに船とはこの事だ、俺は勿論頷いた。

「お願いします！」

そうして俺は冒険者4人組と一緒に街に行く事になった。

異世界チート生活？

7. とりあえず困ったら冒険者

「へえ、マサルって地図に載ってないような集落から来たんだ。」

街へ向かつてる途中で俺は色々聞き込みをしていた。上手い誤魔化し方が思い浮かばなかったので適当に地図に載ってない所から出て旅をしているという出任せを言ってみたが、まあ嘘ではないからいいかな。

「そうなんです、だから街の事や所持品とかお金の価値も分からなくて……」

「おいおい、ずる賢い奴らに会ったら簡単に言いくるめられて素寒貧にされちますぞ。」
ガリウスが忠告してくれる、ほんとにその通りだ。言いくるめられる所か俺は値引きもした事がないし、商人の足元見た値段交渉の話術に勝てる気がしない。

「そうですね、と言っても今の手持ちはナイフ一本しか無いんですけどね。」
「むしろナイフ一本でよく生きてこれたな、弱い魔物しか出ないわけでも無いだろうに。」

密偵のユリウスが周りを警戒しながら話しかけてきた。

「逃げ足には自信があるから、へへっ」

未だに上手に会話が出来てない気がする、コミュ力上げる魔法とかないかな。

「それで街に着いたらどうすんだ？何か働く当てとかあるのかな。」

「うーん、特に決めてなかったんですけど俺も冒険者になろうかな。」

「おいおいおい簡単に言ってくれるけど冒険者はキツイぞ、いつ死んでもおかしくないし最初はパーティを探すのだから一苦労だ。因みに俺らはパーティ組めんど、4人組で安定しているしマサルを守る程余力がないからな。」

ガリウスさん：強面なのに優しすぎないか、アニキって呼びたくなる。

「そうですね、甘い職業とは思ってませんが俺にはこのナイフがありますので何とかな
りそうです。」

そう言いながら俺はナズナに手をかけた。

「へえ、そのナイフ特殊な力持つてるの？鑑定してもいい？」

興味を持った魔法使いのミレーヌが聞いてきた、普通に秘宝級はバレたらヤバそうだけれど、これで良い人か悪い人か区別出来る。まあいきなり襲われたらナズナさんに助けてもらおう、そうしよう。完全に他力本願である

《…》

そんな俺の心を見透かしたのかナズナさんから何とも言えない視線を感じる、目なんて無いだろうに。

「ああ良いですよ、寧ろこのナイフの正しい価値を知りたいからお願ひしたいです。」

「ええくだだのナイフにしか見えないけどなあ。」

サーシャがナイフを見るも「瞥したら興味を無くしてしまった。」

「じゃあ見せてもらう、鑑定^{アプレイヤル}…ヒエエ…」

鑑定をしたミレーヌが可愛らしい悲鳴を上げると共に腰を抜かして座り込んだ。そうなるよな、魔法の無かった世界の俺でさえ引いたもん。

「お、おいどうしたミレーヌ?」

心配そうにガリウスが声をかけると、ミレーヌが震えながらナイフを見つめて話し出す。

「(こっ(こっ(こっ(これ、これひつ秘宝級のナイフ…耐久力も攻撃力も魔力も桁違い…付加されてる魔法も3つ以上付いてるしスキルレベルが9…あ、ありえない…こんなの国宝どころか御伽噺にも出てこない神話のナイフ…」

そう説明するとミレーヌは遂に泣き出した。

「「はあああああ!?!」」

他の3人は息ぴつたり驚いていたが信じきれないようだった。

「おい!マサル!!マジか!?!マジで秘宝級のナイフなのか!?!」

「いや、そもそもどうやって手に入れたんだよ!もしかしてマサルは王族なのか!?!」

「神話に出てくるようなもの王族でも気軽に持ち出せないわよ！何か仕掛けがあるのよね?!本物じゃないでしょ!」

皆パニックになり俺に質問攻めをする、この何とも言えない優越感これはイキつてしまうのも仕方がない位病みつきになるな…気持ちいい。

「ハハハハ・ヒイー…ぶふっふふ…すいません、そんな反応になるだろうなと思つてたら予想通りすぎて笑つてしまいました。」

俺は耐えきれずに笑つてしまったが謝罪し説明に入る、いきなり笑つた俺を見て皆も冷静になった様だが皆はまだ口が開きっぱなしになっていた。

「はあくしつかしこのナイフを預けてくれた人つてのは神様か何かなのか?いや、いきなり森の中に置いていかれるから邪神か?」

俺の身の上話を簡単に説明すると信じてもらえたようでガリウスが同情して言葉をかけてくれる。

「秘宝級をポンとくれるとは…そんな話は御伽噺でも聞いたことが無い程の気前の良さだな。」

「ほんとね〜もう二度と秘宝級に出会える事なんて無いかもだし今の内にたっぷり触らせてもらいなさいミレーヌ。」

「ほ、本当に貴重な体験、出来れば魔法研究学会に持ち込みたい位…こんな業績国を挙げ

ての凱旋になる。」

皆思い思いの感想を述べながらナイフから目を離さないでいた。その様子を面白そうに観察しながら俺は質問した。

「秘宝って世界に幾つあるんですか?これ1つじゃないですよね?」

「そりやあるにはあるが世界中で公表されてるのは9つだ、勿論国が公表してない物や個人が持っている物もあるから絶対とは言えないがな、このナイフみたいに…」

そつからあるにはあるんだなあ、ナズナで無双!つて事には出来なさそうだな。

「にしてもこのナイフの魔力量とスキルの多さは異常、秘宝の中でも上位なはず、私も秘宝を見たのは初めてだけどこれはおかしい。」

「おいマサル、これ絶対に誰にも見せるなよ。マジで殺されるぞ」

「ガリウス達はそのナイフ欲しくありませんか?今俺を殺したら手に入りますよ?」

軽く探りを入れてみた、すると4人が目を合わせ一瞬空気が淀みピリついた気がした。…がそんな空気もすぐに霧散した。

「おいおいマサル、俺達を山賊とかと一緒にしないでくれよ、少し傷付くぞ。」

ガリウスが茶化したように言うと、他の3人も「そうそう」と頷いていた。

《(優様、この者達からは敵意を感じませんのもういいでしょうか。)》

うお!頭に直接ナズナの声が…念話つてやつかな?

(あーあーナズナ聞こえる? もういいよネタばらししちゃって)

そう頭の中で念じるとナズナが理解したかのようにミレーヌの手から離れ空中に浮き自己紹介をした。

《皆様ご挨拶が遅れて申し訳ありません。私、人工知能搭載ナイフ型ゴーレム、名をナズナと申します、よろしくお願いします。》

ナズナが自己紹介を終えるとガリウス達は再び目を大きく開き固まっていた。

?—————?

8. 初めての街、イステマル

ナズナの自己紹介も終わり、興奮冷めやらぬガリウス達に日が暮れる前に街に入りた
い俺は歩きながら質疑応答すると言い、何とか街に着いた。

「到着ー! ようこそマサル! ここが私達が拠点にしてる街、イスマテルよ!」

「おー! 凄いな!! The 異世界って感じだ!」

アニメや漫画で中世ヨーロッパ風の街並みを見るけど実際に自分の目で見ると改めて感動する。ビバ異世界

「にしてもありがとうガリウス、関所で代わりにお金払ってくれて。後でちゃんと返します」

「気にすんなよ、秘宝を触らせてくれたんだから寧ろこっちがお礼を言いたいぜ。そう

言えばマサル金ないなら宿に泊まれないよな?これ、多くは渡せないが2日分位の宿泊費にはなるから受け取れ。こっちは出世払いしてくれよ?」

そう言ってお金が入った小袋を渡してくれた。

「アニキイ!」

「あ、あにき?」

しまった思わず口に出してしまった。

「ま、まあ俺達は兎の尻尾亭に泊まつてるしマサルもそこに泊まればいいさ、あそこは比較的安いし、晩飯も付けてくれる。」

ガリウスと同じ所なら安心だ、今すぐにも行つて寝たい。

「ガリウス達は依頼達成の報告をしに冒険者組合に行くんですよね?俺も付いていこうかな。」

「冒険者になるなら次いでに来るか、ナズナさんがいるから大丈夫だとは思いますが冒険者はいつ死んでもおかしくないから気をつけろよ。」

ガリウスの忠告を聞きながら俺は冒険者組合に付いて行つた。

「冒険者登録ですね、銀貨2枚になります。冒険者の等級は駆け出しの銅、熟練者の銀、一流の金。その上の金剛がありますがこれは特例なので気にしないでください、各等級に5段階分けられており銅5級から始まり銅1級になりますと試験を受け銀5級に上

がります。ここまでで何か質問はありますか？」

「金剛っていうのはなんですか？」

「金剛は金級の冒険者がチームないし徒党を組まないで達成出来ない依頼を1人で達成出来る方に与えられる称号で、受付条件が2人以上の依頼を1人でも受けられたり、街からの定期的収入を貰えたり様々な特典が付きます。この街には1人もいないので是非初めての金剛級冒険者になれるよう頑張ってくださいね。」

元氣付けの冗談を言いながら明るい笑顔で受付嬢さんが説明してくれた。

「おーいマサル、俺達は報告終えたけどまだ時間かかりそうかー？」

「俺ももう終わってまーす！受付嬢さん説明ありがとうございましたー！」

受付嬢さんにお礼を言いガリウスと合流し何事もなく宿に向かった。

「はあー！疲れたく異世界の食事は美味しくないって小説のおきまりだったけど普通に美味しかったな。にしても良い人達に会えて良かったなあ」

ガリウス達と食事をした後俺は一足先に部屋に戻らせてもらった。

「とりあえずお金の基準とか冒険者に必要な情報が欲しいけどナズナそういう魔法ない？」

《周辺探査スキルを使えばある程度の情報は得られると思います、スキルレベル9ともなれば魔力が続く限り【空間把握】が行えますので時間さえあればこの星全土の情報

が得られます。》

マジかよ、ナズナさんガチでチートだな。

「じゃあ、とりあえずこの街を範囲としてあらゆる情報の収集をお願い。あと金策の情報を優先的に」

ガリウスにお金を返そうにも銅5級が受けられる依頼は小遣い程度だろう。なるべく借りは早く返したい

《了解しました、暫くお待ちください。》

そう言つてナズナが魔法を展開する、俺はその間に仮眠を取る事にした。

《優様、情報の収集・整理が完了しました。》

「はやっ！もう少して寝れる所だったよ。」

大体約10分位でナズナさんは情報を集めきつていた、さすナさんだ。

「とりあえず聞きたいのはお金の基準と金策方法かな。」

《かしこまりました、まずお金についてですが、この世界では銅貨・銀貨・金貨の3種類が使われており銅貨が100円、銀貨が1000円、金貨が100000円になっております。》

簡単に助かるな、でも金貨で10万円つて大金を運ぶ時金貨が重くて大変なんじゃないのかな？

《次に金策方法ですが魔法道具を扱う店で魔水晶が高値で売買されており、私の持つ
鉱石魔法と魔力を使えば纏まったお金を稼げるかと。》

魔水晶かあ、魔法道具とか魔法使いの杖の媒体になるのかな？結構需要あるなら稼げ
そうだな。

「魔法で生み出した物質って消えないの？ていうかナズナの自動修復とか自動魔力回復
の供給源なんなの？」

素朴な疑問とずつと気になってた謎を言ってみた。

《基本魔法で生み出した物質は魔力による疑似物質ですので時間が経てば消えますが
通常の10000倍の魔力を消費すれば魔力で魔力を物質に変換する事が出来ます、この
方法は魔力消費が莫大で並の魔法使いでは砂粒や石ころが限界だと思えます。》

魔力で魔力を物質に変換したらそりゃ莫大な魔力必要になるよな、それで作れるのが
石ころ程度ってそりゃ誰もやらないか。

《私の修復及び魔力の供給源ですが、これは一般的な方法ではなくカフ様による別宇
宙にある膨大な魔力塊、宇宙のダークマターを次元を越えて供給させていただいてま
す。》

急にSFちつくになるじゃん：カフ宇宙にも手を出してんのかよ、そんな話もして
たっけ。

「それ俺も考えた事あるわ膨大な宇宙とか星から資源取れば地球の資源問題解決するよなあって。」

《流石でございませす、なおそれを実行し星丸ごと一つを素材にした武具をカフ様は作っておられ、それを天体級と名付けておられます。》

星丸ごと一つって：僕の考えた最強の武器！を地でやっちゃってるカフさん化け物でしょ。

「じゃあ、とりあえず魔水晶を作るのをやってみよつか！俺でも出来る？」

《かしこまりました。では私を持ちながら水晶を想像してください。そして鉱石魔法を心の中か口で唱えてください。》

そっか詠唱は口に出さなくてもいいんだよな

(鉱石魔法！)

【水晶生成術式発動】

心の中で唱えると頭に水晶を作るのに必要な呪文が浮かぶ

ゆっくり時間がかかりながらも小さな水晶が出来ていく、とりあえずソフトボール位まで大きくするか。

「ナズナ、水晶をソフトボール位まで大きくしたいんだけどどれ位かかる？」

《約5分程度かと思われませす。》

結構かかるんだなと思いでれ位魔力消費してるか確認するためナズナを鑑定する。

「ナズナ!? 凄い速さで魔力数値が減ったり増えたりしてるけど大丈夫か!」

1万もある魔力がとんでもない早さで減ったかと思えば同じ速さで回復している、多分魔力1万じや到底足りず随時魔力を供給してるんだろうな。

《問題あり、ありません、最低限で、で魔力消費を止めて自動魔力回復(IX)で絶えず絶えず供給してまいりますので:》

全然問題ありそう、ごめんナズナ:

少しバグってるナズナを心配しながら何とかソフトボール大の水晶を作ることが出来た。

「ここに魔力を入れたらいいんだな? どうやっていれるんだ?」

《私から水晶へ魔力が流れるのを想像してください、私が補助いたしますのでそれで流れると思います。目安は大体10万もあれば金貨100枚は固いと思います。》

「金貨100枚はヤバそうなので魔力1000位にするか、ちなみにこの水晶はどの位魔力入るんだ?」

《魔力産純水晶なので大体1000万は入るかと》

「だったら勿体なさすぎるな: 碎いて魔力が1000まで入る小さい水晶に出来る?」

《かしこまりました。ウィンドカッター風刃》

小指程度の小さい水晶が10個ほど欠けた

「この欠片達に魔力注げばいいのか?」

《左様でございます。》

俺はナズナから水晶へ魔力が流れるのを想像する

「うわあ、魔力つぼいのが腕から体を通って腕に行く感覚がする…すげえ…」

小学生並みの感想を言いながら俺は水晶に魔力を注いだ。

《優様、もう大丈夫です。魔水晶が完成致しました》

「へえ、透明だった水晶が紫がかってキラキラしてて、綺麗だなあ」

正直売るのが勿体ないくらい綺麗な水晶が出来たが何時でも作れるので何とか収集

欲を抑えた。

「よし、あと10個程作ったら寝るか!」

魔法を使う事自体が楽しく、半分遊びの様に魔水晶を作り、作業が終わると意識を失うかの様に眠ってしまった。

《おやすみなさいませ優様。

フィジックスデیفエンス

物理防御 (IX)

マジックデیفエンス

魔法防御 (IX)

スピリットデیفエンス

マルチプル

境界 (IX)

要塞障壁 (IX)

《どうか良い夢を。》

初めての交渉、初めての冒険者稼業

9. 金策と初仕事

「よし、とりあえずこんなもんかな。」

翌朝、起きて早々俺は水晶を欠片にし、それに魔力を注ぐ作業を行っていた。宿の店主から皮袋を買い取りそこに魔水晶の欠片―計30個ほど―を入れ魔道具店に出発した。

「ここが魔道具店であつてる?」

《はい、ここがこの街で一番大きい魔道具店かと。》

ナズナの案内で着いたのは街一番の魔道具店【黒猫の足跡】だ、因みに異世界の文字は読めなかつたのでナズナの補助魔法で翻訳している。

「いらつしやいませ、【黒猫の足跡】へ。お客様はここは初めてでいらつしやいますか?」
中に入ると礼儀正しい執事の方―40歳位?―が出迎えてくれた、高級店みたいだ。

「えっと、魔水晶の買い取りをお願いしたいんですけど。」

「了解しました、担当の者を呼びますので暫くお待ちください。」

そう言つて執事さん―仮称―を下がるのを見て俺は周りの魔道具を観察した。

「へえく色々売ってるんだなあ、水魔法の込められた魔水晶を取り付けた水瓶に火魔法の込められた魔水晶を取り付けたフライパン、魔道具だけじゃなくて魔水晶の付いた杖もあるし、あれって風魔法の付いたブーツ？」

雑貨屋に来たみたいでワクワクする気持ちが抑えられず色々物色する。

「何か気に入るものでもありましたかな？」

声をかけられ振り向くと執事さんより歳のとつたお爺さん——大体60歳位だろうか——がいた。

「私が魔水晶の鑑定を行うエルド・ドミニウムです。」

「あつマサルです、よろしくお願いします。」

丁寧な対応に少し気後れながらも挨拶を交わした俺は鑑定を行う為別室に案内された。

「これなんですけど。」

「ほう小粒ながらも良い光を放つ魔水晶ですな、マジックスウェーピング魔力測量。おお！この大きさに対し

てこれだけの魔力量、これは純度が高く傷も少ない。マサル様は良い腕をお持ちでいらつしやる。」

「ほんとですか！あつ、ありがとうございます。」

いけないいけない相手を持ち上げて良い気分にした所を買い叩かれる的な戦法だ

ろうか、褒めなれてないから危うく飲まれそうになる。まあただの考えすぎだろうけど「これ程の魔晶石ですと、そうですね：銀貨70枚でどうでしょうか？」

想定より少ないな、足元を見るのか分からないが少し鎌をかけるか

「自分の予想では金貨2枚はいくと思つてたんですが、うーん他の店舗にも顔を出して検討してみてもいいですか？」

鎌をかけてみるとエルドさんの顔つきが変わった

「マサル様は交渉も上手いですな、銀貨80枚で。」

「金貨1枚と銀貨50枚」

「ふむ…お互いに落とし所は同じみたいですな、金貨1枚でいかがでしょう？」

やっぱり金貨1枚が適正なのか、ナズナさん様々だ。

「分かりました金貨1枚でお願いします、あとそれが30個ほどあるんですけど全部買いい取り出来ますか？」

「さ、30個?!いい、いえ全ての品質をチェックしないとけませんので暫くお待ちくださいー!」

そうか、普通は魔力量もバラバラだし全部チェックしないといけないのか。まあでもこの様子だと需要はあるから纏めて売つても価値が下がる事は無さそうかな? どうだろうナズナ。

《この程度ならば問題無いと思いますが、これ以上となると店側や大金を得たと知った荒くれ者達に目を付けられると思いますので程々にした方が良いかと。》

そっかあ、そうだよなあ。いくらナズナがいるといつても怖いお兄さんと戦うにはメンタルが豆腐すぎる。

「マサル様、測量が終わりました。全て高純度で傷も少なく高品質でありますので、合計金貨31枚で買い取らせて頂いてもよろしいですか？」

金貨31枚！日本円で310万円！宝くじ当たった気分だな、思わず顔が綻んでしまふ……フヒッ

「んっんん、はいそれをお願いします。」

綻んだ顔を直しつつ俺は何とか魔晶石の買い取りを成功させる事が出来た。

「ガリウスー！丁度良かった渡したい物があるんですけど。」

【黒猫の足跡】のオーナーから金貨を受け取ると数枚だけ手持ちに入れ後は宿に置いてきた、部屋にはナズナが多重に魔法やら結界やら障壁をかけていたので盗まれる事はないだろう。時間もまだ昼前で折角なので依頼を受けようと冒険者組合に顔を出すと丁度ガリウス達が依頼を受けていた。

「おっマサルも依頼受けるのか？昨日はよく眠れたか？冒険者にとつて体は資本だからなよく食ってよく寝てよく働くんだぞ。」

アニキ…マジどこまでも付いて行きたいっす。

「ありがと、おかげで昨日はぐっすり眠れました。そしてこれ出世払いじゃないけど、恩を返すね。」

そう言つて金貨1枚を手渡す。

「おいおい俺が貸したのは銀貨5枚と銅貨20枚だぞ？これは多すぎる、というよりどうやって稼いだんだ？ちゃんと正規で手に入れたんだろ？うな…？」

明らかに怪しんでる、無一文だった奴が急に金持ちになると普通疑うよな。

「安心してください、ちゃんと正規で手に入れたお金なので、少しナズナに手伝つてもらったんですよ。ほらこれ」

そういつて新たに作つて小袋に入れていた魔水晶をガリウスに投げ渡した。

「こりゃあ、魔水晶か？どうやっ…まあナズナさんの力なら不可能じゃないか。」

納得なのか思考放棄なのか分からないがガリウスは話を信じてくれた。

「魔水晶！マサル、魔水晶見せて見せて！」

魔法使いのミレーヌが魔晶石に食いついた、まあ魔法使い御用達だしな。ていうかナズナ見せた時よりテンション高くない？

「おー…この魔晶石小さいけど純度が高くて魔力許容量ギリギリまで魔力が詰まってる！凄いい、自然界では中々お目にかかれない1級品。」

「良かったらそれいりますか？まだ在庫はあるからお礼としてあげま」

「ほんと!? 良いの!? やった! マサル良い人!! 何でも力になるよ!」

「やっぱりミレーヌさんテンション高くないですか? ナズナ見せた時よりテンション高いのちよつとシヨックなんですけど…」

「あつ…えつえと、魔水晶は身近にある高級品だし、魔法使いにとつては緊急用の魔力供給源になるし魔道具も作れるから…あ、あとナズナ様は凄すぎて実感湧かないつか…」

急にしどろもどろになって表情がコロコロ変わる可愛い人だな、あとナズナ様って完全に崇められてるな。

「冗談ですよ、それで皆さん何の依頼を受けに行くんですか?」

「護衛の依頼だよ、まあご鼻屑にさせてもらつてる所からの依頼だな。顔を覚えてもらうと指名で定期的に護衛の依頼が入るんだ。」

流石ベテランって感じだ。さすべだ

「マサルは何受けるんだ? ナズナさんがいるからつて余り調子に乗ると痛い目に合うぞ。」

「俺は薬草とかの採取にしようかなと思います。」

「以外だなナズナさんが付いてるからつてつきりモンスターを狩りに行くんだと思つてた

よ。」

「初めは薬草とか覚えないと怪我した時とか大変かなって思いました。」

「意外と慎重なんだな、いや森で出会った時から慎重だったか。ガハハ」

ガリウス達に激励されながら薬草—アオバミ草—を採取する依頼を受理した、薬草1枚に付き銅貨1枚というほんとお小遣い程度だが今はお金に困ってないし、こういうのをやってみたかったんだよな。ガリウス達と別れると俺は森へ向かった。

?—————?

10. 本格的な戦闘と今後の目標

「ナズナ、身近のアオバミ草1枚だけ探してくれないか、それを見本にして後は自分で探したいんだ。」

《了解しました。それでは正面5m先、右3mまでお進み下さい。》

ナズナに案内されながら俺は見本となるアオバミ草を採取し、それと見比べながら自力で他のアオバミ草を探す事にした。

「これはアオバミ草、これは違う、これはアオバミ草……」

《優様、周囲に敵意を出したゴブリンが潜んでいます。半径10m以内、数は5体です、討伐しますか?》

「討伐するする!なるべく自力で戦うけどヤバくなったら助けて。」

《承知しました、では最低限の防御系魔法をかけさせて頂きます。

ファイジツクスデイフエンス
物理防御(Ⅲ)・

マジックデイフエンス
魔法防御(Ⅲ)・プロジエクトイルミティゲイション
飛び道具軽減(Ⅲ)》

「これくらいバフかけてもらってゴブリン達と互角って事？」

《その通りです。》

マジか、いやでもまあ現代人のニートがいきなり戦闘民族と戦うってなれば妥当か。

「よし、とりあえず敵の位置を確認して、出来るなら奇襲を仕掛けたいな。」

「周辺探査」

棍棒的な物を持つてるのが4体、弓持ちが1体か。全員にバレてる気がするから奇襲は無理かな、とりあえず完全包围される前に近接武器持ちのゴブリン1体に向かって走る。

「ギツ!? バレテル!」

「まずは1体!」

自分に向かってきたのに驚いているゴブリンの首に向かってナズナを振りかぶる、向こうも首を狙われてると気付いた様子で首を守るように棍棒を構える。

「せーのっ! えっ!」

ガイン! と鈍い音と手に衝撃が来るだろうと覚悟していたが、ナズナは棍棒とゴブリンの首を豆腐を切るかの様にスっ! と優しく切り落とした。

「ナズナさんヤベエ…全然切った感触無かったぞ、流石秘宝。」

《恐縮です、尚今の切れ味は周りに被害が起きないよう全力の10分の1に設定致しました。》

今ので10分の1かよ、全力でやると戦車とか切れそうだな…

「何はともあれ残り4体！油断せず行くか！」

それから約1時間かけてゴブリンの群れを倒すことが出来た。

「いってて…ゴブリン1体ずつなら何とかなるけど2体以上になると翻弄されるな、やっぱ数は力だなあ。矢もガツツリ刺さったしナズナの回復が無かったら死んでたな、ありがとナズナ。」

あれからゴブリン1体を更に倒し、もう1体をナズナの切れ味を鉄剣に落としながらほぼ互角の戦いをしていたら残りの近接ゴブリンと弓を持ったゴブリンが合流し、追い込まれたがナズナの補助もあり、何とか倒すことが出来た。

《優様のサポートが私の役目です。》

なんかナズナさんから誇らしげな表情が見える…顔なんて無いけど。

「にしても武器の扱い方は独学じゃ限界あるよなあ、でもチーム組むほどコミユ力も実力も無いし…んんん人手が欲しいな、人山人海…あっ！奴隷だ!!異世界と言えば奴隷じゃん！」

俺はウキウキで奴隷を連呼した。異世界物でよく奴隷が出てくるが人の印象は様々だ、奴隷文化は悪って考えの人もいるし、しっかりとした勤務内容且つ人徳的な対応なら奴隷はありなんじゃないかって考え方の人もいる。

因みに俺は主人が害されないようしつかり束縛されていれば何でもOK派だ、自分がされて嫌な事は極力しない様にしてるが自分より下の人間を見ると安心するタイプのクズと自覚している。

「ナズナ、あの街に奴隷商みたいなのはあつたか？」

《ごさいます、奴隷を購入されるのですか？》

「そうそう！お金も多分足りると思うし、とりあえず見に行つて良い人が入れば買うつて感じかな。」

《了解しました。今から向かうので？》

「そうだね、ゴブリンの耳と後何枚かアオバミ草採取したら戻ろつか。」

俺は次の目標を決めると高まる気持ちを抑えつつ鼻歌交じりに採取に勤しみ、街へと戻つて行つた。

奴隸と主人と倫理観

11. 奴隸の扱い方

「マサル様はどんな奴隸をお望みで？」

営業スマイルを向けてくる目の前の男性は奴隸商の店主だ、ナズナの案内で奴隸市場に来たものの思ったよりも奴隸が多くて決めかねる。

「えーっと、剣を扱える男の奴隸が欲しいんですね、あくあと生意気な女の奴隸も。」
「な、生意気な女ですか？ ああ：マサル様もお好きですねえ」

何かに納得した様子の店主は “ニチャア” という表現が合うような少し汚い笑みをこぼした、おおかた俺が生意気な女を屈服させるのに興奮するタイプの男だと思つたのだろうか：まあそういうプレイも嫌いじゃないがそれが目的ではない。

「では暫しお待ちを。」

俺の条件に合う奴隸を探しに奥へと店主は戻り、その間に俺は色んな奴隸を観察していた。

【鑑定】

「うーん、良いスキル持つてる奴隸は早々いないかあ、あの子可愛いな、でも性病持ちか

…あの子火球使えるのか、でもブスだなあ…」

元の世界なら批判されそうな事を呟きながら俺は奴隸観察を楽しんでいた。

「お？ 精霊術師で精鋭騎士！ すげえレアな子がいるじゃん、どれどれ…」

どれも強い職業な筈なのに何故奴隸になっているか気になるが、その子を見て一目で分かった。

「マサル様、奴隸の選定がすみませ〜…ああ、その女が気になりますか。曰く何処かの有名な騎士団長だったらしいんですが、戦で負け慰み者にされた拳句四肢を切り落とされて、とても商品にはならないんですけど無理やり買い取らされてしまつて…困つたもんです。」

見ただけで悲惨な扱いを受けたんだろうと分かるほどの生気のない表情に藻掻く事すら出来ない体。元は整った顔に抜群の体型だったのだろうと思うと余計に心が痛む、そしてとても俺の琴線に触れた。

「それはともかく、こちらにマサル様がお気に召すような条件に当てはまつた奴隸達はこちらです。左から元盗賊に村の用心棒、最後に元冒険者の男です。」

「意外と少ないですね。」

「戦える男の奴隸は戦力になる為需要がありますし、そもそも手強いので手に入れようとして手に入るものではないですから。」

それはそうか、漫画とか読んでたら男の奴隷とか何の需要があるんだって思ってたけど重労働だけじゃなく、護衛とかモンスター狩りが出来るならそれなりに需要は高くなるか。

「じゃあ、戦える男より戦える女の方が需要は低いんですか？」

「まあ、そうなりますな。力仕事なら男の方が使えますし、夜伽用なら身売りした女の方が顔も勝りますからな。」

うーん、じゃあ無理に戦える男の奴隷買わずに戦える女の奴隷を買う方が安上がりか？でも折角買うならちゃんとして剣術教えてくれる方が良いし…とりあえず鑑定してみても良いのがいれば買おうかな。

元盗賊は、うん。見た目が悪いし能力値もさほど良くない、用心棒さんは能力値が高いけどスキルがあまり無いな。じゃあ、やっぱり元冒険者の人かな、冒険者としてのアドバイス欲しいし。

【ライド】

L v. 9 : 魔剣士

体力 : 25

筋力 : 25

素早さ : 20

知力：15

器用さ：10

魔力：15

スキル：格闘術（Ⅰ）・剣術（Ⅱ）・火球（Ⅰ）・風刃（Ⅰ）

魔剣士つて結構レアじゃね？でも全体的に能力値あんまり高くないな、全部平均的？
器用貧乏つて奴かな？

「その元冒険者にします、いくらですか？」

「こいつはそうですね、金貨15枚ですかな。」

《（優様、少々高く見積もられているかと。値切りが可能です）》

だよな、俺も高くね？つて思ったもん。いくら需要があっても150万はちよつと手が出しにくい。

「うーん、少し高いですね、まだ買うのもう少し安くしてもらえませんか？」

「そう言われると断りづらいですな、ならこの女を買い取って頂けませんかな？マサル様の要望通り生意気な女でしてね、こいつも冒険者なんですが素行が悪く口も悪いため何度か返品を食らってまして。こいつとセットで金貨20枚でどうですかな？」

「へえ、冒険者してたのに顔も良くてスタイルも良いのにもつたいない。ならこの子を貰おうかな」

「へっ！なんだいあんたそんな細い体して。あたいを躡ける事が出来ると思ってるのかい？プツ！」

説明通り口が悪いし唾飛ばしてきた…よし、こいつにしよう。

「やめんかこいつ！【締タイトニング縛！】」

「うぐっ！くそ…」

店主が魔法を唱えると女に着いていた首輪の様なものが締めまり、女が苦しそうな声を出す。

「それが奴隷を束縛する呪文ですか？」

「そうです、直接唱えなくとも相手を見て念じたり、主人に害を及ぼそうとしたら自動で締め上げます。」

なるほど便利だけど打ち合いの訓練する時に反応しないかな、少し不安だ。

「じゃ、その男とこの女、あっちよつと待ってくださいね。」

俺は男の奴隷に近付いて話しかける。

「あなたの仲間か大切な女性はいませんか？その人もついでに買い取りますよ。」

「な、何故ですか？」

「もしいるなら離れ離れになるのは悲しいでしょ？あつ疑ってますね…現実的に言えば人質みたいなもんですよ。」

「人質と言われましても奴隸なので裏切る事は出来ませんが……もしいるとして貴方はその子を世伽に呼びますか？」

「ああ、その心配はいらないです。世伽用は別で用意すると誓います、いるんですね？」

「……はい、います……同じ冒険者仲間で恋人のユタが。」

「店主さん、そのユタつて子も買います。あとあそこの四肢欠損の人も。」

「はいはい毎度ありです……なんと？あの慰み者にもならなそうな女もですか？」

「まあ、使い道は色々ありそうですし、ね……」

「わかりました！あの女も買ってくれるということだと合計4人合わせて金貨25枚でどうでしょう！特別価格ですよ？」

あの男と女で金貨20枚として男の恋人が金貨8枚位しそうだけど、結構まけてくれたのかな？……どうだろうナズナ

《そうですね、通常より金貨2〜3枚ほど安いかと。》

「それでお願います。」

「ええ、マサル様とは長い付き合いになりそうなので安く致しました。今後もし奴隸を買うなら……鼻頂にお願いしますね？」

なるほどそういう事か、流石商人しつかりしてる。

4人を受け取り奴隸市場を抜けると宿に戻る。

「まずはこの子を治さないと、ナズナ出来る?」

《お任せください、オールヒリング・アブノーマルコディションリファイケーション・スピリッツノーマライゼーション》
 【全治癒】・【状態異常浄化】・【精神正常化】《》

他の奴隷達はナズナに驚き更にナズナが放つ魔法に呆けていた。

「あれ? 私は……ここはどこだ……?」

正気を取り戻した女騎士さんは状況が把握出来ずにキョロキョロしていた。

「貴方は奴隷として売られていて、それを俺が買いました。次いでに体の傷も治しておきました。」

「そうだ……私の腕! 脚!! えっ……全部、ある……なったんで、どうやって……うっうう……あ、あり、ありがとうございます……」

自分の体が元に戻っているのを確認して安心したのか女騎士さんは泣いてしまった、それから女騎士さんが泣くのを待ち落ち着いた所を見計らって話し出す。

「改めて俺は皆を買いましたマサルです、俺に剣術を教えて欲しくて買いました。」

「はあ? それだけで奴隷を買うとかあんた金持ちなのかい? 良いところお坊ちやまなんだらうn……」

【締縛】
カストニク

「ぐえっ!」

「いきなり突つかかってくるとは思わなかったけど、あなたの役割はそれです。舐めら

れるといけないと思ったので一人晒し者が欲しかったんですよね」

「ぐっ…それだけの為にあたしを買うとかあんた馬鹿なんじゃ」

【締縛】

「ぐええ…」

「どんどん反抗してくださいいくらでも締め上げますので」

満面の笑みでそう言うのと女も火が着いたのか暴言を吐きまくる。女が暴言を吐くと俺が締め上げる、また暴言を吐いて締め上げるを繰り返す、それを見ていた他の奴隷達は「うわあ…」といった表情でドン引きしていた。なんならナズナも引いていたような気がする。

「…」

「もう反抗しないんですか？」

「…」

【締縛】

「ぎぎっ！ちよつとなんでよ！」

「面白くてつい…」

遂に生意気な人が屈服したので次に移る。

「とりあえず皆さんの名前を教えてください。」

「俺はライドです。」

「わ、私はユタ…です。」

「レンカ・キーライトです、主よ。」

「…ナスハよ。」

「人めつちや忠誠心高そうな人いたけど、まあいいか。」

「とりあえずライドさんとレンカさんに稽古つけてもらおうかな、あと世伽だけど普通に手を出すからね。あつでもユタさんには手を出さないよ、ライドとユタの自由恋愛は許可します。」

「ありがとうございます。」

「あ、ありがとうございます。」

「なんかいまいちユタさんに信用されてない様な…まあそれはそうか、時間をかけて慣れてもらうしかないな。」

「はあー!?何それずつるう!」

「あ、主よ。私はその…世伽の経験が少なくてだな…」

「うるさい奴はほつといてレンカさん可愛いな…」

「その代わり雑用を他の人より多めにやってもらいますね、とりあえず今から外に出て水浴びして身なりを整えてもらいます。」

宿を出て街の外へ行く途中服があまり綺麗じゃなかったので買いに行くことにした。

?-----?

12. 奴隸とお風呂

「ねえ、あんた」

「タイティング
【締縛】」

「ぐう!ご、ご主人…」

「どうしました?」

「ご主人が持つてるナイフ、さつき喋ってなかった?ありや一体なんだい?」

「あー、後でまた紹介するけど今は特別なナイフってだけ言っておくね。」

「ふーん?」

そんな話をしながら古着屋に着くとそれぞれ3着ずつ普段着や下着を買い、レンカとナスハは世伽用のランジェリーを2着ほど買わせた。

「ご主人も物好きだよねえ、ほんと…」

「ほ、ほんとにするのか…いや恩を返す為だ、覚悟を決めなければ…」

ナスハが呆れ、レンカは顔を赤くしながら何かをブツブツ言っている。

「よし、ここでいいかな。ナズナ、お願い」

《承知しました、【鉱石魔法】・【物質操作】》

人氣がない開けた場所に着くとナズナが硬い鉱石を生成し、それを物質操作で湯船の形にし、それを包み込むように壁を建てた。手際が良い

《【水溜まり】(IV)・【火球】(IV)》

湯船の中に水を溜めた後で【火球】を放ち丁度いい温度まで温める、これで即席露天風呂の完成だ。なお男女には分けていない

「よしシャンプーとかは無いけど水浴びよりはマシかな、ナズナ作れないよな?」

《…明日までに作っておきます。》

「いや作れって言った訳じゃないよ!」

《私は優様の補助をするように創造されました、それなのに優様の望むものが用意できないとは…私自身が許せません。》

ヤバイナズナさんの変な地雷踏んじやった…

「そ、それはともかく皆に挨拶してナズナ!」

《私、人工知能搭載ナイフ型ゴーレム、ナズナと申します。皆様どうぞよろしくお願ひします》

「なにこれなにこれ!?ご主人、これ…いやこの子何!?めっちゃくちゃ可愛いんですけどー!」

「す、凄いな…冒険者の時には見たこともない武器だ…」

「ほ、ほんとですわね…凄いい力を感じます…」

「これが主の力…凄い。」

皆思い思いの感想を呟く、もはやこれを見るのが1つの趣味になりつつある俺はレンカに訂正をする。

「ナズナは他人…?から貰ったもんだから別に俺の力じゃないんだよ、この中だと俺の次に偉いと認識してほしい、なんならナズナが1番偉いまである。」

《優様、お戯れを。》

「へえ…凄いいんだあ、ご主人ナズナ…さんの等級とかあるの?」

「勿論あるよ、秘宝級だよ。」

「へえ…はあ!?ないない!何言ってるの?秘宝級は一般人が持つてていいもんじゃなからー!」

「ん…証明するの難しいな、まあ別に証明しなくてもいいか。」

魔法使いがいればよかったんだけど、まあいいものは仕方ない。

「そういうえばユタは職業なんなの?」

「私は白魔術師です。」

「はえ…白魔術師、回復とか補助系の魔法が得意なのかな?」

「そうです、後はアンデッドに効く魔法とか…でもあまり強い魔法は使えません…」

「そうなんだ、あつお湯が冷めちゃうから入ろうか。何かあつたら困るから男女には分けないけど真ん中に大きな岩でも置いとけば体隠せるかな？」

とりあえず女性が先に露天風呂に入った後に俺とライドが入る、露天風呂の周囲をナズナが境界を張ってくれて見張りもしてくる。ナズナさんに頭上がんねえっす

「はあく良い気持ち、久しぶりの風呂は最高だな。向こうでもずつとシャワーだったしな、あつナスハは俺の前に来い、何するか分かんないからな。」

「そんな事言つて、あたいの裸が見たいだけでしょ。いや〜んご主人のえっち〜」

【締縛】
タイティング

「ぐえっ！もう冗談じゃん…」

「正解だから何かムカついて…」

「えっ?!いや、な、何言ってるんだよご主人…/ /」

あからさまに照れてる、意外とウブなのか?にしてもナスハに対しては敬語じゃなくても話せるようになってきたな、意外とああいうのがタイプなのかもしれない。認めたくないが

「ご主人いま失礼な事考えてなかった？」

「こいつ心が読めるのか?!」

「そ、そういえば、ライドどう?熱くない?」

話の変え方は何時になれば上手くなるんだろう。

「丁度良いですよ、それにしてもお風呂なんて滅多に入れるものじゃなくて少し感動してます。」

「何度か入ったことあるみたいだね?」

「そうですね、火山の近くの街では市民も使えるような大衆風呂と呼ばれるものがありましたので何度か入った事はあります。」

「そんなのがあるんだ面白いね、そういえばライドは魔剣士だったんだよね? 剣術とか教えられる?」

「ご存知でしたか…魔剣士は剣士よりも劣り、魔法使いよりも劣るまさに器用貧乏なのです。ですので基礎は教えられますが、より専門的な技術ですとキーライト殿に指南された方が良いかと。」

「そうなんだ。でも冒険者としての経験があるから冒険者としての助言もあれば教えて欲しいな。」

「あつ!ならご主人あたかも冒険者してたから役に立つよ!」

「ナスハは何の職業だったの?」

「あたいは盗賊さ!」

「ああ、なんか納得する…」

「戦いはあんまり自信ないけど冒険者の心得なら任せてほしいね!」

「頼もしいね」

そんな話をしながら割と楽しい時間を過ごし、宿に戻り食事をして俺達は1日を終えようとしていたが問題に直面した。

「困った、部屋1つしか借りてないからベッドが足りないや。」

「ご主人…」

これにはナスハも呆れていた。幸い4人部屋が空いていたのでそこを奴隷達様に借りて事なきを得たが、ゆくゆくは自分の屋敷が欲しいなど考えてみたり…皆が4人部屋に行こうとするのを見て俺は1人に声をかける。

「レンカはあとで部屋に来て」

「ツ!?は、はい分かりました…」

レンカは顔を赤くしながら4人部屋に行く、ふう…よく誘えたな俺。もう緊張でガツチガチだったけど何とか嘯まずに言えた。

ベッドで横になっていると扉がノックされる。

「どうぞー」

「しつ失礼します…」

レンカが今日買ったランジェリーを着て部屋に来た、えっちすぎる。

「めっちゃ似合ってるね。」

「ありがとうございませす…」

「…」

こんな時なんて声をかけたらいいか分からず無言になってしまふ、陰キヤは辛いよ。

「早速ベッドに入ってきて、今日はもう眠いからすぐにでも寝付けそう。」

「え？あつはい、失礼します。」

ベッドに入ってきたレンカを抱き枕の様に扱おうとレンカはとても震えていた。

「ごめんね、覚悟決めて来てくれたんだろうけど今日は手を出さないよ、疲れてるし俺なりのポリシーがあるから。」

「ポリシーですか？」

「うん、手を出す時は相手を好きになつてからつて決めてるんだ、まあ相手の気持ちには考えてないからただの自己満だし、レンカの事はもう既に好きになつてるから今すぐにでも手を出したいけど。ほんとに今日はもう眠いから今度にする…」

そう言いながら寝落ちしてしまふ、眠りに落ちる前に見たレンカの顔はよく見えなかつた。でも震えは止まっていたような気がする。

持つべきものは奴隷だった

13. 奴隷に学ぶ

カキイン！カキイン！

「もつと足を意識しながら一撃一撃を大切に！怖がつて目を背けない！」

俺は元冒険者のライドから模擬訓練で指導を受けていた、漫画とか読むと自分でも何とかなるんじゃないかと思つてたが全然そんな事は無かつた。剣を持つ手が痛い、奴隷は主人に手をあげようとするると自動で首輪が締まるが主人が許可ー安全を認識ーしていたら締まる事は無かつた。

「マサル様はナズナさんに頼つてあまり体を鍛えてなかつたですね？剣術もお粗末ですし、なにより筋肉が足りない。」

そんな事言われてもほんの前まで剣なんか握つたこと無かつたし：なんて言えるはずも無く言葉を飲み込む。

「いやあ、ぐうの音も出ないです、戦闘自体避けてたのもあるので殆ど戦闘経験もないから基本的な指導は凄く助かります。」

「なら何で急に戦おうなんて思つたんです？」

「えっと、戦いの楽しさに気付いたから…?」

戦闘狂みたいな言い訳をしてしまう、それより

「ナスハ何か機嫌悪くない?」タイトニング【締縛】欲しいの?」

「そんなもん欲しくないわ!ふん!」

「明らかに機嫌悪いじゃん…えっもしかして世伽に呼ばれなかったから妬いてるの?」

「そ、そんな訳ないだろ!」

あ、声に出た。

「ごめん、今日呼ぼうとしてたけど嫌だよね…またレンカを呼ぶよ。」

「!ご、ご主人がどうしてもって言うなら呼ばれても良いけど…? 奴隷だから拒めない

し、仕方がないから、ね!」

ええ…これは惚れてる…かなあ? 早くない? 世伽中に殺されない??

「急にナスハ可愛くなるじゃん、好き…」

「はあ! なっ何言ってるの? 主人! 馬鹿じゃないの!」

ナスハをからかいつつ俺は午前中を訓練に費やした。

「うーん…」

「ん? どうしたの? 主人?」

俺は昼食に屋台で買ってきたご飯を食べながら唸る。

「奴隷いるのに宿暮らしたとき、宿にも悪いし不便だから家が欲しいけど金が無くてや。」

「私達買うのに全財産使ったって事？ほんと後先考えないねご主人。」

「うっ、正論が痛い…ナスハ達を買う資金はこれ売ったらすぐ溜まったんだけどね、毎回大量に売ると不審がられそうで嫌なんだよね。」

「これって魔水晶？ダンジョンとか魔力の溜まつてる地下深くにしか無いのによく採れたね。」

「これ実はナズナが作れるんだ。」

「はあ!?!ナズナさん凄すぎない!?!魔水晶って作れるもんなの?」

「そう、ナズナは凄いんだよ!唯一無二のパートナーだしナズナ無しじゃ生きてけない、もはや正妻と言つても過言じゃないね!」

《過言です…ですが過分なお言葉ありがとうございます…》

ナズナは褒められて嬉しい様な嬉しくない様な、なんとも言えないといった声色をしていた。

「ふーん、魔水晶いくらでも作れるならあたいの知り合いで魔法研究馬鹿がいるからそいつに売ってみる?確かあいつ魔道具開発やら何やらで金持ってた気がするし。」

「そんな知り合いいたんだ!ナスハお手柄だよ!」

「よ、よせやい…／＼／＼」

俺はナスハの提案に乗ると、宿にある魔水晶を回収してその知り合いの所まで行く事にした。

「おーい、クルスいるー？ナスハだけどー」

ナスハが古瘦けた大きな屋敷の玄関前で呼びかけると扉が開く。

「んう…ナスハ？あんた奴隷落ちしたって聞いてたけど…」

「クルス久しぶり〜そうだよ奴隷に落ちて今はご主人に買われたんだー」

軽話を言いながらナスハは俺を紹介する、するとクルスが俺を目利きする様に眺めた。

「あんたがナスハを、ふーん世の中物好きもいるのね。」

「ちよつとそれどういう意味だい！」

「はは、初めましてマサルです。実はクルスさんに相談があつて…」

「相談？まあとりあえず入りなよ、家の前で沢山奴隷を連れた人がいたら周りの印象悪くなるしね。」

クルスはあまり乗り気じゃないにも関わらず俺達を中に入れてくれた。

「で？相談つて何、私あんまり暇じゃないんだけど。」

「クルスさんは魔道具の研究をしているとか、なので魔水晶を買ってもらおうかなって

「思いました。」

「何でわざわざ私の所に？魔道具屋にでも売ればいいじゃない？」

「纏まった大金が欲しいんですけど魔道具屋に売って目を付けられるのは嫌だと思いま
しつ。」

「なるほど…って事はかなりの量の魔水晶を持つてるって事？」

「これなんですけど、少し欠けてますが魔力量はかなり入ってますよ。」

「そういつて俺はソフトボール大の魔水晶―魔力量注入済―を取り出した。」

「へえ中々の大きさね…」マジックスルーエイジング「魔力測量」えっ!?魔力量90万以上!?こ、こんな魔水晶見た事ない!ていうかこの大きさと魔力こんなに入るの!?ねえあなたこれどこで手に入れたの!これも言い値で買うし手に入れた場所の情報も言い値で買うわ!!」

「流石魔法研究馬鹿、急に早口になるのオタクっぽい。」

「出処はちよつと言えないですけど、これいくら位になりますか？」

「入手場所くらい教えてよ!まあでもしようがないか…?ごめんなさい言い値で買うって
言ってしまったけど正直これに釣り合うお金は持ち合わせてないの…」

「えっそんな…?因みにどれくらいの値段で買い取ろうと?」

「こんな魔水晶闇市でも見かけない程の逸品よ、金貨2〜3000枚でも惜しくない
わ。」

金貨2く3000枚!? 大体2、3億円! それはおかしいよ! ナズナも金貨1000枚って言ってたよね?

《(あれは魔力量を10万程入れた場合です、ですが90万で金貨2000枚以上は多いかと。)》

あつそうだ、あの時は魔力量10万って設定したからだ。それでも良い所金貨1000枚だろう

「そ、それはちよつと多く見積もり過ぎじゃないですかね?」

「そうかしら? 闇市だったら皆欲しがるからそれ位でも買い手がつくと思うわよ?」

あゝ闇市感覚で考えていたのか、オークションみたいなものだよな多分。なら価格が上がるのも仕方ないか。

「なら今出せるお金はいくら位ですか?」

「今出せる手持ちは金貨1000枚ちよつとかしら…あつでも待つて! 必ず用意するから誰にも売らないでえ!!」

クルスさんが俺の足を舐める勢いで平伏して懇願する、この人魔水晶の為なら体売りそうだな…

「金貨1000枚でも売って良いですけど条件があります。」

「なにになに!?! 私に出来る事なら何でもするわ!」

「ちよちよ落ち着いて、実は家が欲しいんですけど何か良い物件とか知りませんか？」
「家？うーん、家は無いけど魔道具開発の功績を認めて貰った時に王様から頂いた別荘ならあるわよ。」

「別荘！家より全然良いじゃないですか！」

「そう？でも私この屋敷から出ないから必要なかったのよね。」

柵からぼたもちとはこの事だ。

「で、では金貨1000枚とその別荘を譲ってくれるという条件でこの魔水晶と交換するというのはどうでしょう？」

「本当!?私は全然構わないわよ！別荘を手放せて高密度の魔水晶が手に入るなんて夢見たい！マサル！困った事があればなんでも相談してちょうだいね！」

なんてチョロい…でもこういう人大好きだ。俺の中でクルスさんの好感度が上がっていく

クルスさんから金貨1000枚と別荘の鍵を貰うと俺は宿に戻り荷物を纏め宿で最後の宿泊をする。なお別荘には明日クルスさんが案内してくれるそうだ

「はあくまさかこんなあつさり解決するなんてナスハ様々だなあ。」

「ふふん、もつと褒めても良いよ！」

ナスハも役に立てたのが嬉しいのか機嫌が良い。

「よし明日に備えて今日はもう寝るか、ナスハ後で部屋に来て。」

「えっ!？」

「あ、嫌なら良いんだけど…」

「だっ誰も嫌なんて言っていないだろ!先に戻るから!」

ツンデレなのか…?分からんがOKなのだろう、俺は部屋で待つてる事にした。待つてる間にクルスへちよつとしたプレゼントを作る。

コンコン

「ご、ご主人入っても良いかい?」

「ああ、ナスハ入っていいよ。」

ランジェリーを着たナスハが入ってくる、冒険者をしていた事もあり引き締まった体は逞しい。

「似合ってるね。」

「あ、ありがと…」

いつもの軽口が出ないあたり相当緊張しているんだろう、俺もだが。

「じゃあ、始めるね。」

「あつご主人まだ心の準備が…あつん…んん…」

初めてはレンカだと思っただけ、まっいつか。なんて事考えながら俺はナスハと

一夜を共にした。

?-----?

14. 引越しと大掃除

翌日俺達は荷物を持ちクルスの元に訪れた。

「おはようマサル、準備は良いかしら?」

「大丈夫ですよ、別荘はここから近いんですか?」

「王様が用意してくれた所だし結構良い所だからここから遠いわよ、でも馬車を用意してるから安心して。」

「ありがとうございます。」

馬車に乗り込みクルスから別荘の譲渡する手続きの書類や証明書や貰い説明を受けた、車酔いに弱い俺は正直酔っていた。

「とりあえずこんなものね。」

「ふうくありがたいがとう書類の手続きとかしてもらって、難しいから助かります。にしても結構離れてるならクルスさんに会いづらいなあ、昨日の内に作っておいて良かったな。」

「?なにかくれるのかしら?」

「はいこれ、昨日のよりは小さいけど欠けてないし観賞用になるんじゃないかな。」

そう言つて俺は鈍い光を放つ石で作った箱を渡すとクルスが開ける。

「!?こ、これって!」マジックスーヴェイニング「魔力測 量」魔力量50万もある魔水晶じゃない!しかも綺麗に球体に加工されてて綺麗:ああ美しい:ほんとに貰っていいの!?何が!何が目的なの!」

そう言いながらクルスは魔水晶に頬ずりをしたりキスをしている。

「ははは、喜んでもらえて何より。昨日クルスが何でも相談乗るって言ってくれたからそのお礼かな。」

「これでも金貨1000枚はするのに:恩が返せないわ!かくなる上は私をあげるわ!!
娶って!」

感激したクルスは目をギラギラさせながら自分を差し出す。

「ありがたいけど、今はナスハとレンカがいるから間に合ってるかな。」

そう言つてナスハを見ると恥ずかしそうに目を逸らす、可愛いかよ。

「あら貴方たち:へえなるほど、おめでとうナスハ。」

クルスは何かを悟ったようにニヤニヤする。

「な、なにがだい!ごつご主人もあまりからかわないでおくれ!」

ナスハがぷりぷりしているのを楽しみながら見ていると馬車が止まる。

「さて、そろそろ着いたみたいね。行きましよう」

「わあ、でっけえ:」

思わず声が出る、正直俺達4人じゃ余りまくる位大きな屋敷だった。

「貸し出したりするから月に1回は人を雇って掃除させてたけど正直汚いわね…マサル、大掃除の時間よ！」

魔水晶を貰って上機嫌のクルスは腕まくりをして掃除する気満々だった。

「この量は4人では時間かかり過ぎるし今後もしんどいな、ナスハ達はとりあえず自分達の部屋を決めておいて簡単に掃除してて、俺はメイドを雇ってくるから。」

「あらマサル、メイドを雇うの？それじゃあ私も付いてつてあげる。」

「ありがと、メイドってどこで雇えばいいんだろう？」

「メイドを雇うなら一般的には求人を出すのが普通だけど今すぐ欲しいなら奴隷市場じゃないかしら。」

「結局また奴隷を買うのか…」

「まあ、そうなるわよね。確か市場には貴族御用達の教養を教えこまれている高級奴隷を取り扱う所もあった様な…」

「へえ、そんなのもあるんだ。そっかメイドも教養が必要だから奴隷なら誰でもなれる訳じゃないもんな。」

「そういう事よ。」

メイドへの認識を改めながら俺は高級な奴隷が売っている格式が高そうな所まで案内される。

「いらつしやいませ、もしやクルス様ですか？あの高名な〈魔道具の魔女〉様にお越し頂けるとは光栄です。」

「クルスって〈魔道具の魔女〉って言われてるんだ：有名人なんですな。」

「からかわないでよつ恥ずかしいんだから。」

「良いと思うけどな〈魔道具の魔女〉ふふっ」

「ちよつと！今笑つたでしょ!!」

「ふふふ、ごめんなさい。えっと実はメイドが欲しいんですけど。」

「お連れの方がメイドをお買いになるので？かしこまりました、少々お待ち下さい。」

恭しくお辞儀をすると店主は下がりメイド服を着た奴隷達を連れてきた。

「わあ、メイド服良いね。」

「ありがとうございます、彼女らはうちが手塩をかけて育てたメイド達で掃除に洗濯、料理に執筆何でもござれでございます。」

「クルス、あの屋敷だと何人くらいメイドいけばいいかな？」

「うーん、そうね大体5く6人もいれば足りるんじゃないかしら。」

目の前には丁度5人のメイドがおり、皆違つた可愛さがある。凄いなびつたりだ、まさか狙つて？そんな訳ないよなと店主を見ると、意味ありげな笑顔をされて俺は少し引く。

「じゃ、じゃあこの子達を纏めて貰おうかな。」

「ありがとうございます、纏めて買って頂けるといいう事で少し安くしまして金貨90枚になります。」

うお、900万円！流石メイド高くつくぜ…

「あら安いわね定価の10枚位まけてくれるなんて良心的ね。」

「クルス様のご友人という事で特別価格でございます。」

定価で1000万、1人金貨20枚もするのか…そんな事を考えながら俺は金貨を店主に渡す。

「確認しました、今後ともご最前をお願いします。」

メイドを連れて屋敷に戻るとフロントにナスハがいた。

「ご主人お帰りく無事メイド雇えたみたいだね。」

「ただいま。まあ、雇ったつて言うか買ったつて言うか…それより皆の部屋は決まったの？」

「あたいとレンカは同じ大部屋でライドとユタも同じ大部屋にしたけど良いかい？」

「ああ構わないけど、ナスハとレンカは1人部屋じゃなくて良かったの？」

「大きな部屋で1人は寂しいからね、メイドも住み込みさせるなら部屋も少なくなるし。」

ナスハこんな良い子だったっけ?と思いなから思い出した事を口に出す。

「そうだ、君達の給料は1ヶ月で金貨2枚でどうか?ナスハ達にも同じ金額渡すよ。」

「あの、私達は買われた身ですので食事と寝床さえあれば充分なのですが:」

「あたい達だつて奴隷なんだから給金なんて貰えないさ。」

「そうなる俺が付きつきりでいけないといけなくなるから俺の身動きが取れなくなるんだよね、俺がどこか出かける時皆には休みを出したりするから、その時にお金が無いと困るだろう?」

「ご主人あたいを置いてどっか行つちまうのかい:~?」

「いやそんな予定は無いけど!ナスハ可愛いなあ!こいつー!」

不意打ちの可愛い言動に思わずナスハの頭をグリグリと撫でたりしてイチヤコラしてしまふが、なんとか正気に戻り、話を戻す。

「んん!という訳だから給料は1ヶ月金貨2枚で!ナスハ後でライド達に教えてあげて。」

「了解。」

「じゃあ、本格的に掃除始めるか!メイドさん達宜しくね。」

「:~:~かしこまりました、ご主人様。:~:~」

おうふ、男の夢が叶った。メイド達の手際もよくーあと意外とユタが掃除好きだった

事もありー各部屋とキッチンや風呂の掃除が完了し、残りは後日メイド達がしてくれる事になった。ご飯はクルスが人数分買ってきてくれ何だかんだ充実した一日となった。

「流石お屋敷、風呂場が付いてるとは。ナズナお湯入れてくれる？」

《かしこまりました。》

ナズナにお湯を溜めるようお願いして待っていると。

《優様、こちらを。》

ナズナが長方形の箱型の鉱石を渡してきた。

「これって…：シャンプー!? リンスにボディソープも！ ナズナほんとに作ってくれたんだ！ ありがとう！ 大変だったでしょ？」

《それらの原材料はインプットされていきましたので後は「物質操作」で成分を抽出し、それを「鉱石魔法」で作った容器に入れました。》

「いつの間に…：というかどこに隠してたの？ ナズナ収納魔法みたいな無かったよね？」

《優様にバレないよう物質操作で運んでいました。》

サプライズの為にわざわざ隠してたのか…：意外と茶目つけがあるな。

「ふふ、まんまと驚かされたよナズナ。」

《満足でございます。》

「そういうえば異世界と言えば収納魔法とかアイテムボックスと思うけどカフは付けなかったのな。」

《…カフ様曰く収納魔法はヌルゲーに拍車がかかるらしく付与されませんでした、おのれ…》

ナズナが悔しそうに呟く、おのれ??カフに悪感情持つてない?大丈夫??

「ナ、ナズナさん?カフの事嫌いな?」

《いいえ、ですが優様の要望に応えられない自分が不甲斐なく…》

「ナズナめっちゃ愛おいしいじゃん…」

《優様…》

え?まさかの相思相愛??擬人化したら俺暴走しそう…

「ちよつとー何見つめ合つてんの、お風呂呂にお湯入れてくれたー?」

「あ、ああ溜まったよ。それと説明したい物もあるから皆呼んできて。」

「了解だよ。」

危ない危ない…ナスハが来てなかったら変な空気が流れる所だった。既に手遅れだった気もするが…

「皆連れて来たよー何の説明するんだい?」

「ナズナが作ってくれたシャンプーとリンス、それにボディソープって言ってだな…」

俺はそれぞれを少し自分に使いながら説明した。

「へえー良い匂いだねこれ。」

「確かにこれは凄い。」

「私の実家にも似たような物があつたが香りや質がまるで違うな、一体何を使っているんだろうか…」

ナスハが匂いを嗅ぎ、ライドが感嘆し、レンカが考察する。中でも反応が1番良かったのが

「凄い、凄いです！髪がサラサラになるだけじゃなくて良い匂いもしますし、体もスベスベでモチモチになります！これは全女の子が欲しがりますよ!!」

1番普通の女の子っぽいユター1番が喜んでいる、やっぱり女性はこういうのが好きなんだだろうな。

「はっ！す、すみません！私興奮しちゃって…」

「ははっいや全然良いですよ、寧ろそんなに喜んでくれて俺もナスナも嬉しいです。」

《はい、ありがとうございます。》

「そんな！こちらこそありがとうございます!!」

説明を終えた所で俺が一番風呂に入る。すると

「ごしゅじーん、お背中流すよー?」

「ナスハほんと急にデレすぎない？」

「な、なに言ってるのさ！…こういうのは嫌いかい…？」

「あくもう超好き、よし一緒に入るか！」

2人きりになるとデレデレになるナスハと一緒に風呂を楽しむ、さっぱりして部屋で寛いでいると。

「あ、主よ、きよつ今日は伽はいらないのか…？」

ランジェリーを着たレンカが部屋にやって来る、この前見た時より髪や肌の質が良く、より一層艶めかしく見えた。

「レンカ、髪凄く綺麗になったね。それに何だか良い匂いもするね。」

「そ、そうか？いや、ナズナ殿のシャンプーとやらは凄いな。もうあれは手放せないぞ」

そんな軽口で会話をしながら段々口数が減っていき、俺とレンカは数c mまで近づく。

「レンカ、良いんだね？」

「あ、ああ…でも慣れてないから優しくしたのm…んん！」

そんな事を言われて大人しく出来る男はいるだろうか、いや居ない。出来るだけ優しくするよう努力はしたが、所詮は努力だった。

廻りだす運命

15. 充実した日常と別れ

屋敷をクルスから貰って数週間、最近の1日は殆ど決まっていた。午前中にライドとレンカによる剣術の指導、午後からは冒険者として簡単な依頼を受ける。コツコツ繰り返したお陰で冒険者等級は銅5級から銅4級に上がったりして順調に冒険者ライフを送っていた。そんなある日

《優様》

「ん？どうしたのナズナ？」

《そろそろ1ヶ月が経つかと思われませんが奴隷達をどうするおつもりで？》

「1ヶ月？」

《カフ様が1ヶ月後に迎えに来るという約束だったので？》

「あつ！そうだった！この世界に馴染み過ぎて元の世界に帰る事忘れてたよ。」

ぶっっちゃけ元の世界より今の方が充実している気がする。

《元の世界に奴隷達も連れていく気ですか？》

「向こうで養える気がしないなあ、どうしよ。皆と話し合うしかないかな。」

気は進まないが連れていくにしろ置いていくにしろ話をしない事には始まらない、その日の夜。

「という訳で俺はもうすぐ元の世界に戻る事になるんだけど、皆はどうする？付いてくる？それとも奴隷を辞めてこの世界にいる？」

「話にイマイチついていけませんが付いていかない場合、俺達を解放して頂けるのですか？」

「そうだよ、買ったばかりのメイド達にも悪いけど路頭に迷わないよう金貨もあげるから心配しないで。」

そう説明するとライドとユタ、そしてメイド達はここに残ると宣言した。まあそうだろうね

「ご主人はあたいに付いてきて欲しいかい？」

「勿論！ナスハとレンカは出来ればついてきて欲しいと思ってるよ、でも2人の意志を尊重するから安心して。」

「へへ、ご主人がどうしてもって言うなら仕方ないな。ほんとに世話の焼けるご主人だよ、全く。」

「わ、私も主には恩を返しきれないから付いて行きたいと思ってるぞ。」

「2人共ありがとう……！こことは違う世界だから最初は戸惑うと思うけど一緒ならきつ

と大丈夫。」

こうして残る組と付いてくる組を分けると後は迎えに来るのを待つのみ、残りの異世界ライフを楽しみながら迎えに来るのを待っていた。それから数日後

「今日が丁度1ヶ月なんだよね？」

《そうですね、多少ずれはあると思いますがあつています。》

「なんか緊張してきたな、早く来て欲しい様な来て欲しくない様な…」

ソワソワして待っていたがその日、迎えは来ずそれから1ヶ月が経とうとしていた。

「ナズナ、多少のずれはあると言っても流石におかしくないか？カフに連絡出来る？」

《非常に連絡手段がごさいます、カフ様に接続中…ツ!?通信が繋がらない？そんな

筈は…》

どうやら緊急事態が発生したようだ。

《優様、申し訳ありません。どうやらこの世界からではカフ様に連絡がする事が出来ないみたいです、そしてカフ様が迎えに来ない理由としては向こうの時間軸とこちらの時間軸の流れが違うという可能性があります。》

「向こうの1時間がこっちの1日みたいな事？」

《その通りです、そして向こうの1ヶ月がこちらの数ヶ月もしくは数年になるかもしれないという事です。》

「ええ……んゝあゝまあ良いか！……ここでの生活好きだし迎えに来るまで楽しんでおくよ。」
もう戻れないかもしれないが俺にとつてここが第二の故郷と言つてもおかしくないくらい慣れ親しんでしまった。なのでそこまで悲観的になる事はなかった、ライド達にいつ戻れるか分からない事を告げると皆はガツカリなのか安堵なのか分からない表情をしていた。

?—————?

16. 昇級試験には問題が付き物

それから数ヶ月

「ごしゅじーん、確か今日昇級試験じゃなかったかい？」

「そうだよ、だから今日は早めに午前訓練切り上げたんだ、ナスハ達ももうすぐ銅1級になるんだろ？」

「へへつまーね！また1からはめんどくさかったけど初心を取り戻せた気がして悪くはなかったよ。」

ナスハやライド達は元冒険者であり、かつて銀3級まで上がっていたが奴隷に落ちた為また1から始める事となった。

「そろそろ行くよ、またあとで。」

「了解、頑張つてきなよ。」

ナスハに見送られ俺は冒険者組合まで行く。

「ここがダンジョン…なんか感動するなあ。」

冒険者組合で説明された昇級方法は試験官を連れてダンジョンの奥地まで到達するというものだ、ダンジョンには自然発生型と人工発生型があり

走暗性の様な暗がりを好むモンスターや地下深くから漏れ出る魔力に惹かれたモンスター等が普通の洞窟に溜まり洞窟内で生態系が出来上がり何時しかダンジョンになるものが自然発生型。

何者かが意図的に魔法などでモンスターや迷宮を作り、人を寄せ付けないようにしたり逆に宝を置いて人を誘き寄せたりするのが人工発生型と呼ばれており、試験で向かうダンジョンは既に踏破されている比較的小さな自然発生型のダンジョンだ。

「緊張するか坊主？」

「どつちかと言うと武者震いですね。」

随伴している試験官のベランさんは元冒険者で万が一試験続行不可や問題が発生しても対処出来るようになってる。

「ガハハ、安心しろこの洞窟に住み着くのはゴブリンかキラーウルフ位だ、たまにオーガもいるが今いないのは調査済みだ。」

「ゴブリンも数いれば手強いんですけどね…」

「ああ、その通りだ！若い奴はゴブリンを下に見るが大群でいたり悪知恵を身に付けたゴブリンはとても厄介だ、そこんことを理解してる坊主なら試験は安心だな。」

試験官に太鼓判を押され少しは気持ちりが軽くなり洞窟に入る。

「うーん、ゴブリンがいたりはするけど殆ど単体だな。群れからハグれたゴブリンの住処になつて居るのかな？」

「ああ、そうだ。集落を築いているゴブリンの巢は滅多に無いが、もしあるなら危険度は加速度的に上がる。昔500匹以上いるゴブリンの巢に入った金5級の5人パーティが返り討ちにあつた事例もある、その時は悲惨だったらしいぞ？男は食い物にされ女は慰み者だ、更に5人が持つていた道具で力を蓄えたゴブリン達は手が付けられない状態だったそうだ。」

「恐ろしいですね…：そういうえば自然発生型のダンジョンには行くメリツトあるんですか？お宝も無さそうだし出来れば近寄りたくない雰囲気ですけど。」

「そうだな、一攫千金の宝は無いが組合から報酬が出るぞ。定期的に狩らないと先の事例の様にモンスターが力を蓄えたりするからな、それに宝は無いがダンジョンの奥深くに行けば魔水晶があるぞ、まあ絶対じゃないがな。」

「夢があると言えば夢がある…：のかな？」

周りを警戒しながらも雑談をしつつ洞窟の奥地へ進む。

「よし、ここが到着地点だ。お疲れさん無事試験は合格だな」

「ありがとうございます！魔水晶は…無さそうですね。」

「ああ、そうだな。まあここはそもそも魔力が少ない所だから」

ドスン…ドスン…

歩いて来た道から大きな生き物が歩いている足音が聴こえ即座に息を殺す、そして近くの岩陰に身を隠した。そして足音の正体が現れる

『馬鹿な、ドラゴンだ?!昨日の調査隊の報告では居なかった筈だ、まさかその後…? くっなんて間の悪い…』

試験官が小声で悪態をつく、一方ドラゴンは俺達と出入口を塞ぐ様に座り込む。正直ヤバイ

『ベランさん、あのドラゴンに見覚えは?強さとか分かりますか?』

『あんなドラゴンは見覚えがないな、そもそもドラゴン自体数が少なくここらには居なかったはずだ。そして種類にもよるが壮年期に入ったドラゴンは最低でも金5級が10人必要な強さだ。』

(やつぱりドラゴンはどこの世界でも強いが、しかしカツコイイな…いやいや今はそんな事考えている暇はない。ナズナ勝てそうか?)

《…正直厳しいかと、私のみならばなんとかなりそうですがお2人を守るとなると…

まさか私の「鑑定」が抵抗されるとは…少なくとも私より魔力量がある為抵抗されたかと。(》

嘘だろ!? ナズナの鑑定が弾かれるなんて…少なくとも魔力量1万は超えているぞ…? 絶望の中なんとか状況を打破出来る様な考えを模索していると。

☒人の子らよ、歯向かう気が無いなら見逃してやる。早く去ね☒
念話の様なものが聴こえる、ドラゴンからか?

『ベランさん聞こえましたか?』

『?何がだ??』

どうやら俺にしか聴こえなかった様だ。

《優様、「翻訳魔法」のお陰でドラゴンの念話を聞き取ることが出来たんだと思われます。》

そうか、俺は翻訳で人と話しているんだった。ナズナの翻訳魔法(Ⅸ)ならドラゴンとも話せるのか、すげえ。

『ベランさんドラゴンが俺に歯向かわないなら見逃してやると語りかけてきました。』

『本当か? 何故だ…気まぐれか? それとも俺達を付けて街を見つければ次第纏めて殺す気か…どちらにせよ今助かるなら越したことはない、か。』

『俺が出てみますので安全を確認したらベランさん呼びますね。』

そう言つて俺は岩陰から出てみる、ドラゴンは気づいているようだが一瞥する気もな
いらしい。安全を確認するとベランさんに手招きする。

「坊主ドラゴンの声が聞こえるって事はドラゴンと話せるのか？」

「多分出来ると思いますけど…」

「ならここに住み着いた訳といつまで住み着くか聞いてくれねえか？ここは初心者
の訓練所として使っているから出来れば移動してもらいてえんだ。」

「わ、分かりました。あのドラゴンさん聞こえん？」

「聞こえておる、そして内容も理解しておる。儂は訳あつて魔力を大量に消費してのう、
魔力の回復に専念出来る場所を探してたがここは魔力が少なすぎるのでな、少し休ん
だら去ると約束しよう。」

どうやらドラゴンは人語で話が出来るらしく今度はベランさんも話を聞いていた。

「ドラゴン殿の事情は分かりました、仲間達にドラゴン殿と敵対しないよう説得して
おきます。」

「うむ。」

「すみません少しだけ質問をしても良いですか？」

「ああ、儂は良いぞ。」

「魔力の回復はどの様に行うのですか？」

「魔力を持つ魔物や魔水晶を喰ったり、龍脈から魔力を吸い上げたり色々じゃな。だがここは魔物は弱いし龍脈からの魔力も殆ど感じられん、あまり魅力は無いの。」

「魔水晶を食べられるなら力になれるかもしれない！これとか如何でしょう？」

そう言つて野球ボール大の魔水晶を取り出す、魔水晶は俺が寝ている間にナズナが量産してくれている。非常に備えてだ、出かける時も2〜3個は携帯している。

「なんじゃ良いのか？大切な物ではないのか？」

「持っているの知つていたみたいですね…」

「ドラゴンは魔力に敏感じゃからな、それがあれば一気に回復出来るというものじゃ。良いというのなら厚意に甘えて頂こうとするかな」

それを言い終わるよりも早く魔水晶を受け取り飴でも食べているかの様に噛み砕く。

「おお、凄いいこれだけあれば十分じゃ！人の子よ礼を言う、借りは必ず返す。」

そう言ふと俺達よりも早くドラゴンは洞窟から出て行つた、野球ボール大の魔水晶食つてたつて事はアイツ少なくとも魔力4〜50万はあるつて事だよな？それは勝てねえわ。そんな事を考えていると

「坊主やるじゃねえか！ドラゴンに話しかけるなんて恐ろしい真似すると思つたが、まさかドラゴンが納得する程の魔水晶を譲るとはな！これは組合に良い報告しておく

ぜ。」

ベランさんが話しながら上機嫌に背中を叩いてくる。

「ありがとうございます、大きい出費でしたがドラゴンに借りを作つたと思えば安いものです。」

「それはそうだな！ガハハ！さて、そろそろ戻るか。」

その後は特に問題に巻き込まれることも無く無事に組合に戻ることが出来た、組合ではドラゴンの容姿などをベランさんと一緒に事情聴取を受けたが試験自体は合格だそうだ。

「ご主人お帰りー、どうだった？」

「ただいまナスハ、聞いてくれよ実はダンジョンにさ……」

家に帰り、ナスハ達に今日の出来事を聞かせたり、皆の報告を聞きながら1日を終える。

「それじゃ組合に行つてくるよ。」

俺は試験に合格した為タグを組合に預けタグの昇格をしてもらっていた、そのタグを受け取りに行こうと組合へ向かう。

「おめでとーございますマサルさん、昨日の災難や試験官からの推薦もあり銀5級を飛び級して銀3級に昇格です！」

「ほんとですか！ありがとうございます。」

ほんとに災難だったがお陰で銀3級から始められるのは嬉しい誤算だ、銀等級になると護衛や遠出のモンスター狩りの依頼が多くなる。

「うーん、色々あるけど何が良いか分からないな。お？魔水晶の採掘と鉱石喰いの討伐？報酬も悪くないし面白そう！」

基本報酬で銀貨50枚＋ノルマを越えた採掘量又は討伐量でボーナスが出るらしい依頼を受ける、家に戻りナスハ達と出発の準備を整え翌日依頼場所である鉱山都市グラーザンへと向かう。

「じゃあ、留守番頼んだよ。」

「「「「いつてらっしやいませ。」」」」

メイド達に留守番を任せ俺達は街を出る。

「この街以外のところなんて初めてだからワクワクするなあ。」

「グラーザンは鉱石が豊富に採れる為武器の制作が有名ですね。」

「私が騎士団に所属していた時もグラーザンの鍛冶屋に武器制作の依頼をしていましたよ。」

「でもまあ、ご主人にはナスナさんがいるから武器は必要なさそうだよな、どっちかと言うと防具が欲しいとこだね。」

ライド、レンカ、ナスハが楽しそうに話し合う、すると。
ズウン！

俺達の目の前に空から何かが落ちてきた、地響きが凄まじく大質量の何かだと分かる。

「ナズナ！」

《物理防御結界（IX）・魔法防

御結界（IX）・魔法防

御結界（IX）・精神防

御結界・多重結界（IX）

要塞障壁（IX）》

すぐさまナズナが複数人用の防御魔法を多数展開する、土煙が晴れ姿を現したのは…

「ドツドラゴン!？」

「なんて強大な…」

「くっこんなドラゴン見た事もない…!」

「や、やばいよご主人…!こいつはやばい!」

皆が狼狽えているがこのドラゴンは

「昨日のドラゴンさん!?!どうしたんですか?」

「うむ、借りを返すと言っただろう。俺の用事もとりあえず済んだからそなたを探そうと思っていたが、まさかこんなに早く出会えるとはの。」

「わざわざ俺を探してくれてたんですか、申し訳ないです。」

「気にせんで良い、して何か望みは無いか？ 儂の鱗は人間がよく欲しがっていたぞ。」

「ドラゴンの鱗！ 主殿、ドラゴンの鱗は防具の素材として頂点とも言えます。今から向かうグラザーンでドラゴンの鱗を持ち込めば最高の防具が作られるかと。」

珍しくライドが饒舌になる、まあ冒険者からしたらドラゴンの素材なんて喉から手が出る程のもんだろう。

「なんじゃそなたらグラザーンに行くのか？ 儂の巢もそこにあるから連れて行つてやろうか？」

「奇遇ですね！ ですが俺達は歩いて行こうと思います、お気持ちだけ貰っておきます。」

「そうか？ ならば……ふむ」
そう言うドラゴンは丸くなり大きな魔法陣に包まれた、するとドラゴンを包んでいた魔法陣が小さくなりそこには人間の色気のある女性の姿があった。

「ド、ドラゴンさん？」

「そうじゃ、おっと名をまだ教えてなかったの儂の名はルビアンレイア。ルビイとでも呼んでくれ」

「ルビイさん…俺の名前はマサルです、えつとどうして人間の姿に？」

「グラザーンに向かうなら折角だし儂もついて行こうかと思つてな。駄目か？」

「駄目じゃないですけど…皆も良いよね？」

皆に意見を求めようと振り向くと全員が口を開けて固まっていた、カツカツカツという笑い声を聞きながら俺はどうしようかと頭を悩ませる事になった。

目標の再確認

17. 鉦山都市レーザーザン

「そう言えば、どうしてマサルは僕の背に乗るのを断ったんじや?」

レーザーザンへ向けて歩きながらルビィと談笑しているとそんな質問が飛んできた。

「そうだよご主人、ドラゴンのに乗せてもらうなんて王様でも出来ない機会だよ?」

「いやあ、だつてほら…初めての旅だし皆と仲良く歩いて行きたいと思つてさ?」

「嘘じゃな。」

「え!?!」

「僕の勘が嘘じゃと言つておる、ドラゴンの勘を舐めるではないぞ? かつかつ」

ドラゴンつて嘘見抜けるのか、凄いなドラゴンセンス…

「くつ…別に乗ろうと思えば乗れるんですけどね? 乗れるんですけど、すこし高い所が苦手というかなんと言うか…」

俺は今凄く惨めな言い訳をしているなど自分でも分かる。

「え〜ご主人高い所怖いのかい? ぶぶ! 案外可愛い所があるんだな!」

「くつ!」
タイトニング
【締縛】

「ぐふ…久しぶりにご主人のそれ喰らったよ…」

「ほんと久しぶりだね、最近はナスハが良い子過ぎたから懐かしいよ。」

「ほお、お主ら奴隷と主人の関係なのに仲が良いのう。」

「まあ、奴隷だからどうこうって考えはあまりないので…所でグラザーンってここからどの位遠いんですか？」

「何？お主グラザーンまでの距離を把握せずに行こうとしたのか？この速度で行くと大体2週間以上かかるぞ？」

「え!?2週間以上!?そんな…車が恋しい…」

「車？が何かは分かりませんが街からグラザーンまでの馬車が出ていた気がします。」

「ええ…レンカそれ知ってたんなら教えてよお。」

「申し訳ありません主、主がとても楽しそうにしておられましたので口に出すのは憚りました。」

「あくこつちこそごめんね、グラザーンまでの距離位調べれば良かったよ。」

「どうする？今からでも儂の背に乗るか？儂なら3日ほどで着く事が出来るぞ。」

「でもなあ、高いのは…うーん。」

「じゃあ低空飛行してもらえばいいじゃんご主人！何日も歩くの嫌だろ？」

ルビイの誘惑やナスハの説得で結局俺は乗せてもらう事にした。

「いやあ、ほんとに凄いなあ…ドラゴンの背に乗るなんて夢のまた夢みたいだから実感はまだ無いよ。」

「それは何よりじゃ、ほらそろそろ見えてきたぞ。」

ルビイの背に乗って3日目、俺達はグラーザンに着いたのだった。

「守護竜様ー！守護竜様ー！」

グラーザンの上を通ると人々が顔を上げて守護竜様と叫んでいる、そしてルビイはそれらに手を振って応えるが地上には降りない。

「あの、ルビイさん？ドラゴンが街の上通るのは大丈夫なのか心配だったけど、特に問題なさそうだから安心しましたが今別の心配が増えましたよ。守護竜様って何？お偉いさんなんですか?！」

「かっかっ！今更気付いたのか、そうじゃ！儂は偉いんじゃ、じゃから今下降りるのはマズイし一先ず儂の巣に戻るぞ。」

そう言つて向かったのは王城…ではなく王城を越えた火山の頂上付近だった。

「あつつう…！」

《多数・炎耐性》(Ⅷ)》

「おお、暑くなくなつた！ありがと、ナズナ。」

「ほう、流石ナズナ殿じゃな。」

グラザーンに向かう間にナズナの事は話してある、何故かナズナを格上と認識しており最初は様付けで読んでいたがナズナ自ら様付けを辞めさせると殿呼びに安定した。

「ここがルビイの家ですか？」

「まあ、家と呼べる物ではないし巢じゃな、あの子らにも顔を出すとするか。」

「火山の頂上付近なのにあそこだけ建造物がありますね。」

「まあな、中に入れば分かるぞ。」

ルビイに案内されるまま俺達は建造物に入る。

「ピー！ピー！」

「おおヨシヨシ、元気にしておったか？あまり人に迷惑をかけるでないぞ？」

「お帰りなさいませ、守護竜様！ご子息様達は食事を十分に召し上がれ健康そのもので

いびきますー！」

「うむ、お前達もよく働いてくれておる。この子らの世話は大変だろうが宜しく頼む。」

「はっ！命に換えましても！」

「なるほど、ここはルビイの子供達の家なんですね。」

「どつちかと言うところの子らを世話する人の子らの為、じゃな。この子らにとってここは適温でも、人の子らにはちと暑すぎるのな。」

「なるほど。」

「守護竜様、お連れの方々はどういった関係で？」

「おお、そうじゃった。このマサルは儂の恩人でな！その恩人がここに来る用事があつたらしくて一緒に来たのじゃ、くれぐれもマサルとマサルの奴隷達に無礼を働くでないぞ？このお方には儂でさえ勝てない御方が付いてるからの。」

「は、ははあ！マサル様には我らの守護竜様を助けて頂きありがとうございます！すぐさま下の者にもマサル様への対応を伝えさせて頂きます！」

「はい、ありがとうございます。ですがここには冒険者として来たのであまり仰々しいのはやめて下さい。」

「なんと、そうでしたか。分かりました、ではパレードはやめておきますか？」

「絶対やめて下さい。」

危ない危ない、最初に宣言してなければパレードで見せ物にされる所だった…傳かれるのは気持ちいいけど、パレードはちよつと嫌だな。しかも守護竜の恩人―何をしたらは知らない―なんて、何故か分からないけど偉い人―みたいで恥ずかしい。

「話は済んだか？では、街に行くかの。」

「「守護竜様―！守護竜様こつち見て―！守護竜様握手してください！！」」

「守護竜様これ受け取って下さい！」

「守護竜様是非これ食べてみてくださいませえ！」

ルビイとグラーザンの城下町に行くともまるで大スターが来日した様な熱狂が起きてしまった、どんどん人が集まってきて歩けもしない。

「ドラゴンなのに人気者なんですネ。」

「まあ、数百年はこの土地を守っておるから儂に対する恐怖心は消え、信仰心ばかり高まった結果じゃな。とはいえこのままじゃ歩く事も出来んか…ふむ。」

ルビイが空に飛び上がりドラゴンの姿になる

「皆の気持ちしかと受け止めた！今から王城前で【挨拶参り】を許可するから列になって付いてくるが良い！」

挨拶参りってなんだよ…と思っていると

☒という訳じゃからマサルは今の内に街を見てくるとよい、儂はこのまま王城に戻るから後で来るといい。☒

(分かりました、ありがとうございます。)

ルビイに念話で感謝を告げると俺達はグラーザンを観光することにした。

「ご主人グラーザン焼きだつて！美味しそう！気になる！」

「主殿、あちらに良さそうな鍛冶屋があります、少し覗いていきませんか。」

「『守護竜様の御加護付きドラゴン置物』？御加護とやらは胡散臭いが可愛い見た目をしてるな…！」

「ご主人様今から組合に向かわれますのですか？」

ナスハが名物に釣られ、ライドが鍛冶屋に興味を持ち、レンカが置物に惹かれている。唯一ユタは俺にどうするかを聞いてきたが、目につくもので興味を引くものがなかったからだろう。

「とりあえずお腹減ったからグラザーン焼きでも食べるかな、その後色々巡って最後に組合に行けば良いでしょ緊急性がある訳でもないし。」

皆が賛同した後は色々観光して結局組合に行くのは明日になった、因みにグラザーン焼きは火山の様な金型に生地を流し込み味を染み込ませた細切れ肉をタネにした肉まんみたいな焼きの中間の様な物で結構美味しかった。

一通り観光し終わって王城に行くトルビイの元へ案内される。

「おおマサル、グラザーンは楽しめたかの？」

「お陰様で、土産物とか名物があつて観光地として来ても良さそうですね。」

「そうじゃろそうじゃろ！ 鉱石がよく採れるから鍛冶屋の街と思われるが文化が発展しておるし、温泉もある。そして儂が守護しておるから他のモンスターに襲われる心配がなく食料も安定していて観光地としても魅力があるのじゃ！」

「成程、だから街の人は皆笑顔でルビイに感謝してたんですね。所で温泉って何処にあるんですか？ 是非入ってみたいです。」

「温泉なら王城の中にもある、今日は王城に泊まると良い。良いじゃろ王よ?」

「はっグラーザンの物は全て守護竜様の物でございます。」

「お、王様?! ルビイの後ろにいたからてつきり従者か何かと思つた!」

俺は驚いたと同時に跪く、跪いた事なんてないから合つてるか分からないが立つてるよりはマシだろう。

「マサル殿おやめ下さい、我が国の民に守護竜様の恩人を跪かせたと知られば末代までの恥です。どうかお立ちになって下さい。」

「分かりました、ありがとうございます。それと今日はお世話になります」

たまたま一匹のドラゴンを手助けしただけで、とんでもない事になつたなと思ひながら俺達はグラーザン国王になすがままに持て成された。

「いやあ、とんでもない体験が出来たねえ。」

「俺は粗相が出ないか胃がキリキリしました…」

「王城内に入れるだけでなく王と会食とは…二度と忘れる事はないでしょう。」

「王宮料理ほんとに美味しかったです…見た目も美しくて食べるのが勿体ない位でした…」

部屋に戻るとナスハ、ライド、レンカ、ユタが思い思いの感想を大きなため息と共に吐いた。良かった、皆ガチガチに緊張していたけど楽しんでくれていたみたいだ。

「ライド、温泉行こっか！落ち着いたら皆も温泉行つていいからね。」

俺はライドを誘つて王城内にある温泉へ向かった。

「ああく良い気持ち〜」

「流石は王族御用達の温泉ですね。」

「そう言えばグラザーンって鉾山都市じゃなかった？何で都市に王様がいるの？都市なのに国なの？」

まるで疑問に思つてなかつたが冷静になるとおかしい事に気付く。

「それは私から説明いたしましょう。」

「王様!?!すいません、湯煙で全然気付きませんでした。」

「かまいません、王様と言つても人々の意見を纏め守護竜様にこの国を住み心地良く思つてもらかう為仕えてる身ですから。ここグラザーンは鉾石が豊富で守護竜様の加護もあり、孤立したとしても都市の経済を回せる事が出来ます。」

その為国からの援助を受けない代わりに国からの指図も受けません。そうなつてくるといよいよ都市ではなく1つの国ではないか？という声が上がりがり始め次第に独立を求め国との対立する動きになりました。

しかし守護竜様が国と戦う事を窘め、国もまた守護竜様が守ること衝突する事を恐れ超法規的措置としてグラザーンを都市であるものの独立した封権制度を行う事を黙

認されました。そうして今に繋がるのです」

「へえ、そんな歴史があつたんですね、勉強になります。」

グラザーンの歴史を聞きながら俺は忘れかけていた力による蹂躪や支配に対する憧れを思い出していた、風呂から上がり皆が寝静まった深夜。

「なあナズナ、俺は小説とかで力を手に入れた主人公が力に溺れず人の為に使うのを見て甘つちよろくて嫌だつたんだ。でも今の俺を振り返るとそんな甘つちよろい主人公達と似た様な事をしていて案外そんなもんなんだなつて思い始めたよ。」

《優様はこの世界を支配したいのですか？》

「まさか、支配するのはめんどくさいし、今の俺は弱いから簡単に打ち倒されてしまうよ。ただまあ出来る事なら人生で1回くらい弱い者いじめをしてやりたいって思ってたんだけどね……どうやら俺は小心者の平和主義者だつたらしい。ははっ」

《私は優様が力に溺れるよりも小心者の方が良かったです。》

「それもそうだね、でもこの世界の各国の情報はあつても良いかもしれないから時間がある時に情報を集めていってくれる？」

《承知しました、では魔水晶の制作を一時停止し、情報収集を優先いたします。》

「お願いね。」

俺はこの世界でやりたい事を考えながら明日に備えて寝る事にした。

?-----?

18. ズルというかチート

「採掘場所ですがグララーザン坑道の浅瀬は正式な鉱夫が採掘しておりますので坑道と繋がっている洞窟をお使いください、その際に現れる鉱石喰いを倒し魔石を持ち帰ってもらいませすと買い取らせて頂きます。」

グララーザンの冒険者組合にいる受付嬢さんから依頼の詳細を聞き俺達はグララーザン火山の洞窟へ向かう。

「しっかし、折角貸して貰った冷気が出る作業着もナズナさんがいれば必要なかったね。」

「そうだね、ナズナ様々だ。」

組合で渡された冷気が出る作業着はグララーザンの坑道では必需品だ、しかしナズナによる火に対する耐性魔法の前では無用の長物だった。

「人もいないし、そこそこ魔水晶もあるし、こちら辺で良いかな?」

「じゃあ皆予定通り軽く掘ろっか、ナズナお願いね。」

《承知しました。》

俺達が魔水晶を掘っている間にナズナが事前に用意していたただの水晶ーバスケットボール程の大きさーにどんどん魔力を入れていく、すると段々生き物の気配が近寄っ

てくるのが分かる。

《優様、鉾石喰いが釣れました。合計50匹ほどです。》

「予想以上に釣れたな!? ナズナ皆に補助魔法をお願い!」

《【多数・全能力上昇】(IX)、【多数・斬撃無効】(IX)、【多数・打撃無効】(IX)》

「なにこれなにこれえ!」

「凄すぎる、力がどんどん漲ってくる…」

「まるで自分の体じゃないみたいだ!」

「明らかに魔力量が増えている!? 魔力容量と魔力その物を増やすなんて効率が悪すぎるのに…ナズナ様凄すぎです!!」

ナズナが惜しげも無く最上級の補助魔法をかけてくれる、おかげでライズ達は奇声を上げて興奮していた。

「興奮してるとこ悪いけどもうすぐ鉾石喰いがくるから気を引き締めてね!」

注意したあと直ぐに大量の足音と共に鉾石喰いが現れる。

「これが鉾石喰い…サソリみたいだな!」

鉾石喰いは体長5m程のサソリの様な見た目で尻尾は針の代わりにハンマー状になっており、尻尾を使って鉾石を砕き食べるらしい。

「この量は不味いか…? 皆! だいじょうぶ…あれ?」

「ははは！ 凄いいい！ 鉢石喰いの甲殻が紙みたいに切れるよ！」

「ぐっ…！ 痛く、ない…？ 鉢石喰いの尻尾に当たっても全然痛くない！」

「はああ！」ウインドブレード「風 刃」(Ⅲ)「はははっ！ 俺の風 刃で3体纏めて切れたぞ！ 明らかに攻

撃力と範囲が上がっている!!」

「えい！ えい!! はふう…まさか私が鉢石喰いを殴り殺せる日が来るとは…ナズナ様、素晴らしすぎますう…！」

ナスハが鉢石喰いの攻撃を掻い潜りながら攻撃し、レンカは攻撃を受けながらゴリ押しで反撃し、ライズは威力が上昇したスキルに感嘆してスキルを連発し、ユタは鉢石喰いをメイスで撲殺しながら恍惚とした表情でナズナに感謝の言葉を送る。なんだこれ、俺の奴隷ってこんなに戦闘狂だったっけ…

「まあ、皆楽しんでるなら良いか！ よし！ 俺も行くぞお！」

鉢石喰いを半数以上倒した所で鉢石喰いが逃走し、残った鉢石喰いが数体になった所で魔法の効果が切れる。ナズナ曰く《バフ付与での戦いは修行になりませんので残りの鉢石喰い位は自力で倒して下さい。》との事らしい。

「はあく！ 終わったああああ…普通に戦ったらめっちゃ強いじゃん…」

「ナズナさんのバフが異常なんだよご主人。」

「相手の攻撃が効かないのは些か反則じみていたな…素晴らしかったが。」

「まさかスキルまで強くなるなんて思わなかったです。」

「ああ…鉱石喰いを殴り殺す感触…もう一度味わいたいです…」

1人完全に戦闘狂にジョブチェンジしてるな…と思いながら俺も戦ってた時の気持ち良さの余韻に浸っていた。

(やつぱり命の奪い合いは病みつきになるよなあ、こう生きてるつてのを実感するとうか…)

コツンツ

物音がした方を向くとそこには鉱石喰いの子供だろうか、50センチ程の鉱石喰いが威嚇しながら後ずさりしていた。

「こいつ可愛いな！ナズナこの子ペットに出来ない？」

《申し訳ありません、従属魔法は付与されていないので難しいかと…魔力で脅す事なら出来ますが。》

そう言うとなズナは鉱石喰いの子供の元まで近づき

「シャー！シャー！」

《黙りなさい、あなたの生殺しと奪権はこちらにあるのです。》

「キューン、キューン。」

ナズナが一声かけるとさつきまで威嚇していた鉱石喰いの子供が小さく縮こまって

震えている。

《優様、これでこちらに敵意は無くしたかと。後は餌でもやれば懐くのではないでしょうか。》

「ありがとナズナ！可愛いなあお前、ほらほらこれでも食べて元気出せよ。」

俺は持ち歩いていたナズナ製の魔水晶を与える。

「ツー！」ガツガツガツ！

鉱石喰いの子供は凄いい勢いで魔水晶を食う。

「ナズナ、その子…名前どうするか、蠍だからスコープオン…スコール？スコールを見張つというて。」

俺はナズナにスコールの見張りを任せナスハ達と倒した鉱石喰いから魔石を取り出す。

「これが魔石？魔水晶とは違うんだね。」

「はい、魔石は魔水晶を食べたり、魔力を生み出す魔物の体内にあり、ある一定の強さになると魔法を覚え、魔法が使える魔物から取れる魔石を魔法石と呼びます。魔法石は魔力を通す事で魔物が覚えていた魔法を使えるので、とても高く売買されています。」

「へえ〜面白いね、スコールもいっぱい魔水晶食べさせたら魔法覚えたりしないかな。」

「鉱石喰いは覚えるのは確か強撃や、斬撃、酸吐きだった気がします。」

「うーん、イマイチだなあ。よし！スコールをもっと育てて最強の鉱石喰いにしよう。」
全部の魔石を取り出し、俺達は冒険者組合に戻った。

「お帰りなさいませきやああ！鉱石喰い！」

「待つて待つて！俺のペットにしたから攻撃しないで！」

組合にいた冒険者に切られそうになったスコールを抱き抱える。

「…タイムしたって事ですか？そうであれ隷属の首輪を着用しないとタイムしたと認められませんで忘れないように。」

「すいません、分かりました。あとこれ精算して欲しいんですけど。」

「魔水晶の採掘と魔石の買い取りですね、魔水晶はノルマ分ありますね、魔石は…なんですかこの量！ちよつ、ちよつと待つて下さい！組合長く!!」

組合長が呼ばれ俺達は別室に案内された。

「流石は守護竜様の恩人様でございます、まさか鉱石喰いを50匹以上も倒すとは…」

「まあ、皆と協力して頑張ったので俺一人の力じゃないですよ。」

「なるほど、お強い仲間様もいるとは心強い。ですがタイムしたモンスターの首輪の着用は守つて貰いたい。」

「すいません、今持ち合わせがなくて…」

「なんと…：ティマーなのに首輪を持ち合わせてないのですか？」

「ティマーじゃないので…」

「これは失礼した！いやしかしティマーではないのによく鉱石喰いをティム出来ましたな…よし、分かりました。魔石の精算している間に首輪はこちらが用意しますので暫くお待ち下さい。」

そう言うのと組合長は部屋を出る。

「ふう〜怒られちゃったな、魔石っていくら位するんだろ？」

「鉱石喰いの魔石は大体1つ銀貨50枚はするんじゃないかな？」

「へえ魔水晶より安いね。」

「いや、ご主人の魔水晶の質が異常なだけで普通は魔水晶より魔石の方が高いよ？魔石は魔力を蓄える所だからね。」

「あくそつか、流通してる魔水晶は最低魔力100とかだもんね。」

そんな話をしてしていると組合長が戻ってくる。

「精算が終わったので確認して下さい、基本報酬の銀貨50枚にノルマの魔石5個を除いた魔石75個で金貨38枚です。それと隷属の首輪です」

「ありがとうございます、隷属の首輪の代金は幾らですか？」

そこから首輪の代金は受け取らないと断ってきた組合長と10分程言い合いをし、なんとか代金を受け取ってもらい王城へ戻った。

「おお、マサル鉱石喰いを狩りまくったそうじゃな！流星は儂の恩人じゃ！」

「めつちや恩人を強調するじゃん…ありがと、依頼も終わったし明日には帰るよ。」

「そうか、寂しくなるのう。」

「そうだ、明日帰る前に王様に会えるように伝えてくれるかな。」

「？よく分からぬが良いぞ！」

王様とのアポを取った俺はナズナにサプライズの用意をお願いして、最後の高級ふかふかベットの堪能した。

試行錯誤

19. 覚悟を決めて

「マサル殿、守護竜様からお会いしたい旨があると聞きましたが如何なさいました？」

「今日で私達は帰らせてもらうのですが、その前に王城に宿泊するという貴重な体験をさせてもらったのでそのお礼にこれを。」

そう言う俺は傍に置いておいた布を引くとそこにはバスケットボール大の魔水晶が露わになる。

「こ、これ程の大きさでなんとと言う魔力密度…これを？」

「はい、差し上げます。大体魔力が500万ほど入っておりますので何かに使えるのではないかと。」

「ごっつ500万!? 500万MJマジユルとなるとこの都市の全魔道具供給が数年はこれ一つで賄えます！これは守護竜様に献上するか国宝にすべき至宝！こんな物をお礼で貰う訳には！」

（あ、これはめんどくさい事になりそうだな）

「分かりました、王様の言葉に甘えましてそれを金貨2000枚で売らせてもらいます、

更に欲を言えば王様からの礼状とこの事を王室に代々伝えて頂きたいです。」

「当然です、いえ寧ろ金貨が安すぎますよマサル殿。」

「それは今後私達が困った時に助けて貰う為の前金、でございます。」

「!なるほど、そう言われたら納得するしかありません、マサル殿も強かですね。」

「ありがとうございます。」

無事王様に魔水晶を渡す事も出来、折角だから馬車で帰ろうと思ったがルビイが寂しそうな顔をしていたので結局帰りもルビイに乗せてもらう事にした。ただ帰りは行きよりも2日時間かかったのは気付かない振りをする

「ただいま〜」

「「「お帰りなさいませ、ご主人様。」「」」」

「俺が留守の間に何もなかった?」

「えと、お客様が客室でお待ちしております。」

「え?今?」

「3日ほど前からです、お客様の身分もあり蔑ろにする訳にいかず空き部屋を勝手に使わせて頂きました。申し訳ありません」

「いやそれはいいんだけど…」

俺に身分の高い知り合いなんていないんだけどな、と考えながら客が待つ部屋へ行

く。

コンコン

「お待たせして申し訳ありません、家主のマサルです。」

「いえいえ、こちらこそ急に尋ねてしまい悪いね。どうぞ入ってきてほしい」

「失礼しま…え？」

そこにいたのは明らかに人ではない翼の生えた天使の様な人だった。

「自己紹介をしよう、私はこの世界を管轄している座天使のフォアエルだ。君が異世界から来た旅人だね？」

「えつと…はい、そうです。あの跪いたりした方がいいですか？」

「それは君に任せるよ。」

座天使を名乗るフォアエルが冷えた笑顔を見せる、俺は穩便にすませる為にとりあえず跪く。

「へえ意外と謙虚なんだね、他の天使達から聞いた異世界人はもつと傲慢だったと聞いていたけど。まあいい、私が君に会いに来た理由は一つ。約束をしてほしいんだ」

「約束？」

「契約と言ってもいい、君が与えられた力に溺れてこの世界を滅茶苦茶にしないと誓って欲しい。」

「それは構いませんが、もし誓いを破るとどうなるんですか？」

「天罰が下る、とだけ言っておこう。どうする？誓うかい？それとも今から私と対立するかい？ここら一帯がどうなるか分からないがね。」

「俺は世界を滅茶苦茶にしたいなんて思っていないですから誓いますよ、ですが滅茶苦茶にしない程度の事は許して欲しいです。」

「ほう、例えば？」

「お金持ちになるとか…」

「はっはっはっ、実に人らしい願いだな。その程度なら好きにして構わないさ、では契約するでしょう。」

フォアエルから魔法をかけられ半透明の鎖が俺の体に縛り着く、数秒もするとそれは消えて右手には何かの紋章が浮かび上がる。

「これで契約完了、右手の紋章は我らから認められた証だ。私の信者にそれを見せれば害される事はないだろう。」

そう言うフォアエルは魔法を唱え目の前から消える。

「はあああ、緊張したああ…天使とか初めて見たぞ、なんて言うか神々しかったな。」

《あれは不味いですね、早急に対処方法を考えなければ。》

「敵対しようと思わないでナズナさん!?でもまあ、いつかとんでもない敵と出会うかも

しれないから戦力の増強はしてもいいかもね。あく怖かったけど意外と優しそうだった」

「おい。」

振り向くと消えたはずのフォアエルが戻ってきていた、そして明らかに機嫌が悪い。

「ど、どうしたんですかフォアエル様？」

「道具の癖に私に反抗するとは生意気だな。」

《我が主人の身を護っただけです、あなたこそ盗聴や覗き見は失礼では？》

「えっ……」

どうやら俺はフォアエルから監視されていた様で、それに気付いたナズナが遮断したようだ。

「世界の為だ、お前が生意気な態度を取るならお前の主人を殺しても良いんだぞ？ 主人が俺に殺されても良いのか？」

《その時は何年、何十年、何百年かけてもあなたを殺します。》

フォアエルとナズナの殺気で部屋が軋み空間が歪む。

「……ふん！ 紛い物の神の眷属風情が……」

最後の眩きを聞き取れなかったがフォアエルが消え部屋から殺気が無くなる、俺は思

わず尻もちを着いた。

《申し訳ありません、優様。御身を危険に晒してしまいました…》

「いいよいいよ、俺の身を案じてしてくれたんだろ？寧ろありがと、ナズナがいてくれてほんとに心強いよ。」

《勿体なきお言葉…ですがこのままでは不安が残ります…ですので優様の身を護る為ゴーレムを作りたいと思うのですがご許可頂けますでしょうか？》

「ゴーレム？ナズナゴーレム作る魔法無いよね？」

《はい、ですが私自身ゴーレムであり、私の核情報をコピーすればゴーレムを作る事は出来るかと。》

「そうなんだ！分かった、許可するよ。俺もビクビク怯えるのは嫌だからね！ナズナと一緒にどんな事でも覚悟出来る気がするよ。」

そうしてナズナによるゴーレム制作が始まった。

？—————？

20. ゴーレムと実験

フォアエルと邂逅した日からナズナは鉱石魔法を使い様々な鉱石を作り出していた、凄く硬い鉱石から柔らかい鉱石、液体状の鉱石や魔水晶も作っては複雑に組み合わせていた。それから1ヶ月

「優様、優様。おはようございます」

「ふああ…おはよう…ん？誰？もしかしてナズナ…？」

俺のベットのの前には黒髪ロングでとても清楚なお姉さんといって感じの美女メイドが立っていた。

「私はナズナお姉様ではございません。」

「ナズナ、お姉様…？」

《おはようございます優様、ようやくゴーレムが完成致しました。【完全自立式成長人型ゴーレム】でございます、個体名はございませんので名前をお付け下さい。》

「すげえ！めっちゃくちや凄いやナズナ！どう見ても人にしか見えないし綺麗だ！つていうかナズナお姉様って呼ばれてなかった？」

《私の核情報をコピーした存在ですが、独立行動が出来るように私とは違う人格をインプットし私の姉妹として作成しました。》

「そうなんだ、でもナズナから生まれたなら母と娘って感じじゃ…」

《何かおっしゃいましたか？》

「いついや、なんでもないです！名前…名前決めないとね！」

ナズナから謎の圧力を感じ俺は必死に話を逸らす。

「ナズナの妹というか、もう一人のナズナだから…ナズナ草の別名とか分かる？」

《…ペンペン草や三味線草ですね。》

「三味線、シャミ…シャミはどう？」

「ナズナお姉様と同じ草の名前…気に入りました！私は今日からシャミと名乗らせて頂きます。」

「気に入ってくれて良かった、それでシャミは何をするの？」

「はい、私は成長型ゴーレムなのでナズナお姉様が覚えていない様な魔法も覚える事が出来ます、ですのでーから学ぶ事になります！魔法の研究をしたいと思っています。」

「凄いいじゃん！じゃあ空間魔法とか是非覚えて欲しいね。」

《その前にシャミには【自動修復】と【自動魔力回復】を覚えてもらわないといけません。》

「ナズナの魔法は覚えてるんじゃないの？」

《殆どの魔法をコピーさせる事は出来ましたが私の【自動修復】と【自動魔力回復】だけはカフ様にしか付与出来ない特別な魔法を使っておりますので、シャミには一般的な【自動修復】と【自動魔力回復】を覚えさせたいと思っています。》

「確かナズナの回復方法は別宇宙から無制限に魔力を持ってくるんだっただよね？一般的な修復魔法や魔力回復はどうするの？」

《普通は空気中の微細な魔力を吸収したり魔水晶を取り込む事で魔力の回復を行いま

す、ですがその方法だと余りにも時間がかかってしまう為カフ様は私を別宇宙から魔力を吸収出来るようにしたのです。》

「それまでにシャミの魔力は無くならないの?」

《魔力の自動回復が出来ない為かつ私の核情報を詰め込む為に身体中の魔水晶に100万MJ^{マジュール}注入しておりますし、人間と同じ様に食事を摂ると体内で有機物を魔力に変換する事が出来るようにしていますので暫くは大丈夫かと。》

「1000万!?!凄いな、ていうかMJ^{マジュール}ってグラザーンの王様の言ってた単位だよな?何なのそれ。」

《単なる単位ですので魔力量1なら1MJとなります。》

「なるほどね、いやあにしてもほんとに人にしか見えないなあ…触つてもいい?」

「私は優様の物ですのでお好きにだけお触り下さい。」

「ヤバイ…スベスベもちもちで手に吸い付く…一生触つてられるな…」

《むっ…》

俺はシャミの肌を触れる事に夢中になってしまいナズナの機嫌が悪くなるのに気付かなかった、そしてシャミを皆の前に連れて行く。

「これから一緒に過ごさせて頂くシャミと申します、ナズナお姉様の妹として精一杯皆様をサポートいたしますのでどうぞよろしくお願いします。」

「何このすつごい美人！ナズナさんの妹ってどういう事!？」

「こんな人がいるなら私はもう夜伽のお役御免だろうな…」

「それに何というか、溢れ出る気品がまるで王族…や、やめてくれユタ、メイスは痛い…」

「…ふんっ」

みんな喜怒哀楽色んな感情が混じった感想を呟いてるけど、何とか仲良くなれそうかな？一言だけ言っておくか。

「シヤミは限りなく人に見えるけどゴーレムだから夜伽とか呼べないよ、だからこれからも頼むよレンカ、ナスハ。」

「そうなのか！わ、分かった！任せてくれ。」

「しようがないね、あたいのご主人はご主人だけだし。」

レンカはあからさまに嬉しそうに、ナスハも分かりずらいが安堵していた。

「それにしてもゴーレムかあ、自立思考が出来るなら誘導ミサイルとかの代用も出来そうだな〜」

《自立思考ゴーレムで誘導ミサイルですか、優様も中々エグい事を考えますね。ですがふむ…なるほど参考になります。》

「ほんと？参考になる？ならさ、俺の世界のおとぎ話みたいなものもあるんだけど…う宇宙空間から落とす鉄の塊みたいなのがあるだけ…」

ナズナの参考になればと俺は上機嫌で色々な化学兵器―実際にある物やゲームとかで出てくる近未来兵器など―の話をした、ナズナも興味深そうに話を聞いてくれて俺は久しぶりに昔を懐かしんだ。

俺はレンカ達と訓練や冒険者稼業、シャミは魔法の研究、ナズナは新たなゴーレムの作成研究を進め更に1ヶ月が経った。そんなある日の夜

「まさかスコールに純魔力産の魔水晶与え続けると魔法を教える事が出来るなんて…なんだ？」

俺はその日の振り返りをしながらベッドに入ろうとすると先客がいた。

「…」

「…ナズナ？」

「！そ当然了！ナズナです！！何故お分かりになったのですか!？」

「いや、見たことも無い美少女だから勘で…」

「流石は優様！それに美少女なんて…／／／」

ナズナと判明した美少女は16〜17歳くらいでシャミが美人系ならナズナは可愛い系でゴスロリとか地雷系の服が似合いそうな感じだ。

「照れてるナズナも可愛いけど先に説明してもらえるかな…？」

「承知致しました！この体はシャミと同様の素材で作っておりますが私自身が使えるよ

うに人格はインプットしておりません、ですので本体であるナイフからこの体に意識を移動したり又はナイフにいながら簡単な指示で動く【連動式人型ゴーレム】でございませぬ！」

「凄いな…後なんかテンション高くない？」

「やつと完成した事と人型になった事で感情を表現しやすくなった為少し表現力が大きくなっているのかと思います！」

（少しか…？）

「それでナズナはなんで俺のベッドに？」

「優様は仰いました、もし私が人型なら好きになっていると。人型になれば抱いてやると…！」

えっ言ったつけ？…なんか似た様な事は言った気がするけど抱いてやるは言っていない…はず。

「抱くといつてもその体はゴーレムだろ？」

「ちゃんと疑似生殖器は備えております。」

「マジか！凄いなナズナ!!」

思わず頭を撫でまくる。

「はう…それで優様は私を抱いてくれますか？」

ナズナは捨てられそうな子犬の目をして上目遣いで見てくる。

「それはズルすぎる!」

「キャツ!」

嗜虐心を唆るような見た目で誘われたら本能が抑えられるはずもなく俺はナズナを
一晩中可愛がった。

「昨日は素晴らしかったです優様…」

妙にテカテカしてるナズナを連れて皆の所へ行く。

「ご主人おはよう、お? ナズナさんもおはよう。相変わらず可愛いねえ」

「おはようナズナ殿、遂に叶ったのだな。」

「ああ、ナズナさんですか、おはようございます。」

「ナズナ様あ、人の体も素晴らしいですう…」

「はい、皆様おはようございます。」

ナズナとナスハ達は何事も無く挨拶をする。

「え?! 皆知ってるの! なんで!?!」

「皆様には前もって報告と口止めをしておいたんです、優様にサプライズしたくて!」

そう言えば前もサプライズでシャンプー作ってくれてんだっけ、意外とサプライズ好きなんだよなナズナ。そんな事を思い出す

「また驚かされちゃったな。」

「ふふ、サプライズ成功です！」

「じゃあ皆も集まったし朝ごはん食べるか！」

なんだかんだ元の世界よりも充実した異世界生活を送っているよなあと思いながら俺達は食堂へ向かった。

新たな家族と日常

21. 何事も極めればそれなりになる

「よしよしよし！」

「シヤァ♪」

「あんなにちっちゃかったのに、もうこんなに大きくなりやがって！スコールはでかくなっても可愛いなあー！」

俺はグラザーズの洞窟で出会った鉱石喰いのスコールを全力で撫でていた、当時は50センチ程だった体長も今では3mを超えそうとしている。

「高密度の魔力産魔水晶なんて自然界に中々無いものを食べていけばこうなる事もあるかあ」

「キシヤァ！キシヤァ！」

スコールが同意する様に鳴き声を出す、自然界に魔水晶はあるが数が少なく質も悪い。だがスコールにはナズナが作る最高品質の魔水晶を与える事が出来るので特別な鉱石喰いになるのではと思っていた、予想通りスコールは大きくなるにつれ体の表面が魔水晶と同じ様な薄らと紫に輝きだした。普通の鉱石喰いは黒色から変わらないらし

い

「それで魔法を込めれる位に魔石が成長したんだっけ？」

野生化の鉱石喰いは成長している途中でスキルを覚え魔石に刻み魔法石になるがスキルはスキルを覚えるよりも早く魔石が成長していた、その為外部から魔法を刻めば魔法を覚えさせる事が出来るらしい。

「うーん、何の魔法を覚えさせようか。強い攻撃系とか防御系が良いんだろうけどスキルはペットって感じだし小さくなる魔法とかあつたら覚えさせたいなあ。」

「ありますよ。」

「うわっ！びっくりした！シャミか…もうそんな魔法まで覚えてるの？凄いな。」

「殆どはカフ様から知識として入れられた情報を再現して習得した物なので難しくはありませんが、生物・非生物の巨大化・縮小化魔法も習得済みです。」

「大きくもなれるんだ！いざとなったら山みたいにでつかくして戦えば最強になりそうだね！」

「では【体積変化】の魔法を刻みますか？」

「お願いするよ。」

シャミがスキルに魔法を付与する、スキルもそれを受け入れ大人しくしていた。

「完成致しました。巨大化・縮小化の範囲は魔力量に比例します、あとはよく訓練を行う

様にして下さい。」

「ありがとシャミ！スコール早速小さくなれる？」

「シャー！」

「おお！凄いい！可愛い手の平サイズだ！」

「おめでとうございます優様、それとスコールの魔石が意外と高品質なので後幾つかは魔法を覚えられるかと。」

「そうなんだ、じゃあどんどん魔改造しようかスコール！」

「シャッ!？」

俺は1日を使ってスコールにあれやこれ魔法を詰め込んだ。

「ふう、こんな物かな。ありがとシャミ、スコールもお疲れ。」

(とんでもありません主人)

スコールの魔石に知能向上する魔法と念話の魔法を刻み、スコールと会話できる様になつていた。

「にしてもこれはもう鉋石喰いではないよなあ…」

スコールに【鑑定】を行う。

【スコール】

種族：アクジキ（始祖）

L v. 45

体力：1580

筋力：2500

素早さ：2000

知力：350

器用さ：125

魔力：3000

スキル：体積変化（V）、秀才（IV）、念話（VII）、斬撃術（IV）

打撃術（VI）、自己再生（III）、万物摂食、子産み

無属性魔法（III）、人化術、即時対応（V）、魔力変換

（III）

：正直詰め込みすぎたな、見た目もトゲトゲしさが増して明らかに強者感出てるし、なんなら種族変わってるし。始祖で：余裕で俺より強くなってる。

「最強の鉱石喰いにしてやるって言ったけど、まさか種族変わってしまうとはなあ…」
「鉱石喰いの上位種という位置付けで良さそうですね。」

「そうだね、よし！スコール人化してみて！」

（承知）

スコールが小さくなっていく、そして現れたのは高身長のパニーテールでギザ齒娘。カッコ可愛いの間ぐらいで、体にはサソリの外殻の様な鎧が着いている。

「カッコ可愛い！あと体の鎧もカッコイイ！ていうかメスだったんだ！」

「ありがとうございます、主人。新たな種族になれた事心から感謝し、更なる忠誠を誓います。」

「うん、The 女騎士みたいでカッコイイ。これからもっと一緒に冒険出来るね！」

俺とスコールは一緒に喜び皆に報告しに行く、報告し終わった後スコールを可愛がっているとなすハにレンカ、更にゴーレム状態のナズナに寝室まで連行され、その晩3人に朝まで搾り取られる事になった。

?-----?

22. 嫁慰安

「死ぬかと思った…ハーレム物って男が絶倫じゃないと成立しないよな。」

昨日こつてり絞られた俺はハーレム物の主人公に脱帽する。

「そう言えば最近ナスハ達と出かけてないよな、ああ…あれもあげようと思ってたのに忘れてたな。」

俺は久しぶりにナスハとレンカ、ナズナと観光にでも行きたいなと思い、あれこれ計画する。

「じゃあ、ライドも楽しんできてね。」

「ありがとうございます主殿。では」

俺はライドとユタに休暇を出し、ライドと出かける場所が被らないよう話し合った。メイド達にも休暇を出しているので数日は戻らなくても大丈夫だ

「皆行こっか！」

「観光なんてグラーザンで少し周った時以来だねご主人。」

「ほんとにね、今日は王都まで行って色々見て回ろうかと思うんだ。」

「私は優様と一緒にならどこでも構いません。」

「王都ならお勧めのレストランを知っています主よ。」

「レンカは王都にいたんだっけ？じゃあお昼はそこに行こう。」

俺達は王都行きの馬車に乗り観光の予定を話し合った。

「いやあ、流石王都、凄い賑わいだっただよ。」

「レンカのお勧めのレストランも凄く美味しかったよ！」

「ありがとうございます主、私も久しぶりに王都に訪れて楽しかったです。」

「優様と同じ食事が出来るように作っていて本当に良かったです。」

一通り王都を満喫した俺達はカップルが少なからずいる見晴らしのいいベンチで休

む。

「皆に渡したい物があるんだ、受け取って。」

「綺麗…これはブレスレットかい？」

「私のはネックレスだ…」

「これはチョーカー？純魔力の魔水晶がはめられて…どうやって？」

ナスハにはブレスレット、レンカにはネックレス、ナスナにはチョーカーを。それぞれに魔法が込められた魔水晶がはめられている

「シヤミにお願いで内緒で作ったんだ、どう？気に入ってくれた？」

「…とつても！」

「ははっそれは良かった。そろそろ宿に戻ろうk」

ズズウン！

王城に巨大な物が落ちて砂埃が舞い上がる、離れているのに人々の騒ぎ声が聞こえてくる。

「なんだ？王城に何か落ちなかった？ナスナ調べてみて！」

「承知しました、【周辺探査】あれは…【鑑定】

ストライフレイション 成層ドラゴンに棲む龍、

レベル55に達しますが大分弱っています。恐らく何者かと縄張り争いをして敗北し墜落してきたのかと。」

「あんなのが負けるのか…こつからでもよく見えるくらい大きいな50mくらい？」

「120 m程かと、弱っていても並の人間では歯が立ちませんと思いますが如何なさいますか？」

「王様を助けるチャンスって事？ナスハ、レンカ申し訳ないけど観光は終わりみたい。」
「構わないさ、後は帰るだけだったしね。」

「ああ、それに困っている国民達を放つてはおけない。」

「報酬も貰えるかもしれないからね！よし行こう！」

俺達は急いで宿に戻り戦闘準備をして王城まで行く

「金級冒険者はまだか！」

「王は避難なされたのか!？」

「くそ、並の武器じゃ歯が立たないぞ！」

「助けてくれえ…瓦礫に足が…」

現場に着くとそこは地獄絵図と化していた。

「ん？今誰か戦ってるな、なら今は兵士達の救出をしようか。」

俺達は手分けして兵士達を助ける。

「冒険者殿、感謝する。」

「構いません、今戦っている彼らは？」

「銀1級の『アダマンタイトの盾』が金級冒険者を呼ぶまで時間を稼いでくれている。」

アダマンタイト、この世界にも存在するんだな…と考えていると。

「おお！『星降る夜空』が合流したぞ！これで勝てる！」

どうやら金級冒険者達が到着したようだ、お手並み拝見といこう。

「凄いな、人間の動きじゃないよあれ…」

「ああ、そうだろう。あれこそ金級の冒険者と言われる者達だ。」

俺は素直に感心していると兵士も肯定する、金級冒険者達は見事なチームワークでドラゴンを翻弄し攻撃する。しかし

「グオオオオ!!」

ドラゴンの範囲攻撃で近くにいた者達が皆吹き飛ばされる、金級冒険者達も動いているものの瀕死に近い。

「ああ…そんな、金級冒険者がたった一撃で殺られるなんて…」

「これはまずそうだな、ナズナ行こうか。ナスハとレンカは引き続き兵士達を助けてあげて。」

「おっおい！何をしている！無茶だ！時間稼ぎにもならないぞ！」

兵士が心配してくれるが俺はナズナを信じている。

「流石にこれも修行とか言わないよな？」

「そうですね、短期決戦で終わらせた方が良くと思いますので遠距離魔法の修行にしま

しよう。」

「結局修行なのか…よし、やってやる！何の魔法が効きそう？」

「全魔法に耐性が付いていますが、所詮は耐性。どの魔法でも9位階の魔法なら一撃で仕留められるでしょう、ですが周りに被害を抑え尚且つあのドラゴンの素材を手にするなら烈風魔法が宜しいかと。」

「一撃か…流石ナズナの魔法だね。じゃあ行くよ！」

【大鎌鼬・神風首落し】

魔法陣から巨大なカマイタチが現れる、ドラゴンはカマイタチに向けて魔法を放つが効いている様子はない。刹那、カマイタチが尻尾を揺らすとドラゴンの動きが止まる。カマイタチがドラゴンの頭を掴むと胴から頭が離れる、しかし切断面からは血が出ない。正に神業、カマイタチは俺の前にドラゴンの首を置くと役目を終えたかのように消える。

「…凄いな、魔法つて。」

「そうですね。」

周りは静寂し俺とナズナだけの声が聞こえる、そして1分過ぎた時、大きな歓声がある。

「俺の力じゃないけど、まあ悪い気分じゃないよなあ。」

「名声は甘美なるものですから、人が集まる前にナスハ達と合流しましょう。」

ナスハ達と合流した俺達は凄いい勢いで兵士達に囲まれる、そしてお偉い様の様な人が現れる。

「あなた様は我が国の恩人だ、この恩は城が直り次第必ず返すと約束しよう。」

国の大臣と口約束を交わし、俺は自分の住所を伝える。本当は式典でも開きたかったらしいが城が壊された今はそれどころじゃないらしい、夜には王都総出の宴を行い俺が倒したドラゴンを買い取りたい商人達に付き纏われる。交渉はナズナに任せて俺はひたすら人々の感謝の言葉を聞き続ける時間を朝まで過ごした。

「疲れた…精神的疲労で死ねる…」

「お疲れさんご主人。一国の救世主だからね、これからもっと忙しくなるよ。」

「いや流石は主、あのドラゴンを一撃で屠るとは…我が主ながら思わず恐れを抱いてしまっう程です。」

「それを言うならナズナの力だよ、俺は魔法を唱えただけだからね。」

ドラゴン討伐から数日、やっと人々が落ち着き王都の復興が始まり俺は自宅に帰る。

「はあく家が懐かしく感じる、たっだいまあー!」

「きやああ!」

「ご主人様!!」

「どうして!？」

「ありえない!」

「でもナスハ様とレンカ様もいらっしやる!」

メイド達が俺の顔を見て叫び声をあげる。少し、いや大分傷付いた…

「どうしたの皆? 主人の顔忘れた?」

「い、いえ寧ろ顔はよく覚え過ぎているといふか…」

一体なんなんだろう、と彼女たちが怯えている理由を考えていると…

「おつかえりー! いやあすまない、すまない。まさかあつちとこつちの時間の流れが違
うとはねく通信を妨害されてみたいだし。」

「か、カフ!? えっちよっ…いきなり過ぎて言葉が出てこない!」

「アハハ、久しぶり優、まあ何だかんだ楽しんでたようで安心したよ。はいお土産」

カフがゴトリと何かを落とす

「うわ! ふお、フォアエル様!」

「くそ…紛い物の神風情が…」

「うわ! 生きてる!!」

首だけになったフォアエルが恨み言をブツブツ唱えていた。

「こいつも腐っても天使だからねく無駄な手間かけさせてくれたよほんと。」

「手間って…お前ほんとに化け物だよな…ていうか何で敵対してるの!？」

「いやあれが、直接迎えに来ようと思つてこつちに来たらコイツがいきなり現れて『紛い物の神が、この世界に干渉する事は許さん…!』」とか言つて急に襲いかかつてきたから返り討ちにしてやつたよ。」

「ええ…見に覚ええないの…」

カフの登場に驚き思わず話し込んでしまいが、固まつてしまつているナスハ達に気がき、先に帰つてきていたライド達やナスハ達を集め説明する。

「この方がご主人をここに飛ばしてきた人なんだ…」

「まさか異世界にはもう一人の自分がいるなんて…」

「想像もしたこと無かつたな…いやしかし見れば見る程主そつくりだ…」

「この御方がナズナ様の生みの親…まさに神様…」

「ふくん、順調に異世界ハーレム生活してたみたいだね、優?」

「お陰様で、ナズナがいなかったら何度死んでいたか…」

「ナズナって? ああ、あの子の名前か。まさか自分の核情報を使ってゴーレムを作るとはね、流石俺作。」

「カフ様はお変わりなく元気そうでなによりです。」

「カフが来たつてことは異世界生活は終わり?」

「戻りたくないの？」

「いや、帰るよ。帰った後カフに相談があるんだ。」

「良いよ、よしまずは帰ろうか。」

あらかじめ元の世界に帰る事を皆に伝えている為準備は円滑に進む。

「ライド、君さえ良ければこの屋敷を使つて欲しい。勿論メイド達もここで働いてくれて構わない。」

「ですが…」

「シヤミはここに残つて魔法の研究するらしいから出来ればあの子の力になつて欲しいんだ、もしかするとまた俺達が帰ってくるかもしれないしね。」

「ありがとうございます…主殿が戻ってくるまでこの家を守らせていただきます。」

「頼んだよ、メイドの皆も元気で！」

「二「いつでもお帰りをお待ちしています！」「二」

「それじゃ、行こうか。」

俺はカフの後に続き次元の門を通る、1年ぶりの実家は何も変わっていないかった。

帰郷と邂逅するオルタ

23. 実家は寄るだけ

久々に帰ってきた実家を見てなんとも言えない懐かしさが込み上げてくる。

「へえ〜ここがご主人の家かい、立派だねえ。」

「俺というか親の家だし、賃貸だからrってそう言えば母さん達は俺の事心配してなかったのか!？」

「お前の家族には俺から説明しておいたよ、しばらく俺が居座る迷惑料として1000万位渡したら『あの子の代わりにいくらでも居てくれていいからね。』て言ってくれたぞ? 良い両親だな、ハハハッ!」

マジかよ、いやニートだから心配されないのは仕方ないけど少し傷付いた…

「それで、優はこれからどうするんだ?」

「そうだった、カフお願いなんだけど俺とナスハ達をお前の所で住まわせてくれないかな?」

「良いのか?この世界に未練は無いのか?」

「無い事は無いけど…ナスハ達を養わないといけないし、冒険者みたいに働くのは好き

「だけど、この世界で冒険者みたいな事は…無い事は無いけど需要が少ないから。」

「ふうん、まあ優がそれでいいなら俺は別に構わないけど。今から行くか?」

「いや、最後に家族と話しておきたいから明日でもいいか?」

「分かった、優の母親の手料理は美味しいからな。」

カフに何も言われず許可を貰った事に安堵しつつ俺は自分の部屋に行き荷物の整理をする、家族が帰ってきて俺の顔を見ると嬉しそうな顔で泣いていた。なんだかんだ俺は愛されていたらしい

「まさか優が異世界で嫁さんを貰ってくるとはねえ。」

「それも沢山、な…」

「母さん達に紹介出来て良かったよ、それじゃそろそろ行くよ。」

「ほんとに行つてしまうの?この世界じゃ優は満足出来なかったの…?」

「ごめんね母さん、でもやっと俺したい事が見つかったから…」

「優が納得しているならそれでいい、困った時に助けに行つてやる事は出来ないが優の中に父さん達の血が入っている事は忘れないでくれ。いつでも優の事を思っているぞ」「ありがと父さん…俺も忘れないから!兄ちゃん達にもよろしく言つて…!」

最後まで言うと思わず涙が出てしまう、それに連られて両親も涙を流し出す。

「泣くなよ優、今生の別れでもないし。」

「え…？カフ、でも帰って来れないんじゃない？」

「帰ってこれないなんて言っていないだろ？この世界線には目印を付けてるからいつでも帰れるぞ？」

それを聞いた俺と両親は呆然と顔を見合わせ堪らず笑ってしまった。

「ハツハハ…はあ、なんだよそれ。それじゃ泣くのはおかしいよな、父さん、母さん行つてきます！」

「行つてらっしゃい優。」

俺は笑顔で両親に見送られた。

？—————？

24. カフの住む世界と神

「ここ、ここがカフの住む世界…」

カフの転移魔法で着いた先は中世の名残が残ったロンドンの様な街中だった。

「どうだ？綺麗だろ俺の世界は」

カフが自慢げに語りながら空間魔法を閉じて出てくる、すると辺り一面の空気が変わる。

「えっ嘘…」

「本物!？」

「凄い凄い！私初めて拝顔した！」

「今日なにか祝い事あったっけ!？」

辺りが騒然としたし、それに気付いたカフが手を振る。それだけで

「「きゃああああ!!!カフ様ああ!!!」」

「「おお…：我らが万能の神よ…：!」」

「「今日という日に感謝を！我らが神に祈りを!!」」

俺達から10 m程離れた距離まで近寄って大量の人々が大歓声を上げながら笑顔に向けてくる、何かの宗教か？つてくらい熱狂的で正直怖い。

「は？えつと…：カフこれは…：」

「そりゃあ不老で強大な力手に入れたら世界征服くらいするつて優、それでいて絶対者が老いる事無くあらゆる事に精通していて数千年経つとどうなると思う?」

「神として崇められる…?」

「正解！まあ俺1人というか複製の俺達の力なんだけど、まあ同じ様なもんだから神として扱われてるんだ。因みに俺は凡百の神を名乗らせてもらってるよ。」

宗教みたいっていうか宗教だった。

「すげえなカフ…：違う世界線の俺は神にもなれるんだ…：凡百の神つて割にはさつきカフ様とか万能の神とか言われてたけど?」

「俺はフレンドリーな神様を目指してるからね、頻繁に顔を出す事はしないけど数年に1回はパレードをしたりするよ。呼び方も厳しく取り締まらなかつたせいで万能の神とか言われてるけど流石に万能は無いよね俺にも限界はあるし、ははつまあ全知全能って言われるよりはマシかな。」

「あ、ああそうなんだ…」

俺は余りの歓声にカフの話聞き流してしまう。

ゴーン…ゴーン…

後ろの方から大きな鐘の音が聴こえた、すると歓声を上げていた人々は一斉に跪き、さつきまでの賑やかさが嘘のように静まり返る。後ろに気配を感じ振り返ると

「う、わあ…でつかい城だなあ…でかすぎてちよつと怖いな…」

「凄いだろう？高さは大体1kmはあるかな。」

「デカすぎんだろ…そんな事を思っているよ。」

「我らが神よ、拝顔の栄に浴します。本日はどの様な用事で？」

「今日もお勤めご苦労様クロム、別世界の俺にこの街を見せて驚かせてやりたくてね。」

「という事はお隣の方が神の…お会いできて光栄です、私アルコールヴァ神王を預かって頂いていますクロム・リオン・ヘカートと申します。」

「丁寧ありがとうございます、私は日野優と言います。」

この国の王様と軽く挨拶を交わして俺達はカフが普段暮らしている住居へ案内してもらおう。

「やっべええ…」

「何処か懐かしさを感じます…」

「もう一人のご主人はとんでもないね…」

「これが神の住む世界と言われても信じてしまいそうです…」

「とても綺麗です主人…」

俺達が口を開けて呆けてしまうのは仕方ないと思う、何故なら。

「どうだ？これが俺、いや俺達が数千年かけて創った地下巨大コロニーだ！」

カフが自慢するがこれは素直に感嘆するしかない、まさか王城がカフにとつてはただの玄関に過ぎず、王城から地下へ伸びる昇降機に乗り下るとまるでもう一つの国の様な世界が姿を表したのだ。

「なんでわざわざ地下に…」

「そりや色々利点があるからに決まってるだろ？それに俺がまだ一人だった頃は表立って行動すると目を付けられ易いから地下でゴーレムや、初期の複製した自分を行動させてたんだよ。」

昇降機が到着するまで俺はカフからこのコロニーが出来上がるまでの歴史を聞いて

いた。

チーン

「やつと着いた〜」

「「お帰りなさいませ創造主様。」」

昇降機を降りると凄惨な数のメイド達が出迎えてくれた

「ああ、ただいま。将輝と熊重呼んで来てくれる?」

「畏まりました。」

「カフ、この子らって一体…」

「ああ、この子達は俺の作ったゴーレムだよ。ていうかここには俺かゴーレムしかないんだよ。」

「ゴーレム!?人間にしか見えないな…いやナズナも人間そっくりに作ったから驚きはそこまでないか。にしても…」

周りを見渡すと色々なゴーレムや人にしか見えないゴーレムが沢山いるが、何よりも目が行くのは…

「カフがいつぱいいる!ちよつと怖い!!」

「はははっ!当たり前だろう?俺の、俺達だけのコロニーなんだから。外なら皆バラバラの仮面被ってるけど此処ではしなくてもいいからな」

「これどれがどの自分か分からなくならないか？」

「そうだな、まあ大事な情報は情報記録専門の俺達に集積してそこから必要な俺達に分けてるから大丈夫だ。」

「聞いているだけでこつちが大丈夫じゃなくなるよ…」

カフの異常な優秀さに辟易していると

「おーそれがまた別の世界の俺か。」

「随分と女を沢山侍らせてるな。」

カフ達とは明らかに違う俺と同じ顔の2人組が話しかけてきた。

「優、紹介しよう。この2人は優と似た世界から連れてきた別の俺達、将輝と熊重だ。」

「よろしくな、同じ境遇の俺。」

俺は思わず引き笑いをしてしまった。

嘴矢濫觴

25. これぞ自問自答

「改めて、俺は槻木 将輝。将輝で呼んでくれ」

「俺は真白 熊重、俺も熊重で呼んでくれて構わない、よろしくな。」

「よろしく、俺は日野 優。俺も優で構わないです、2人もカフに誘われてここに来たん
ですか?」

「ああ、そうだが。別世界の自分なんだから敬語は辞めてくれよ優」

「あくありがと、でも敬語は癖になってるから出来れば敬語の方が話しやすいんだ。た
まにタメ口も出るから完全に敬語って訳でも無いんだけどね」「なるほどな、それより俺は優の後ろに侍らせてる美女達が気になるぞ。優はハーレム
好きな、いかにもって感じのなろう系主人公だな?」「えっいやあ、俺はあんまりなろう系主人公好きじゃないけど何時の間にかこうなつて
たつて言うか…はは。」「そうは見えないけどなあ? ははっ冗談だ。所で優は何のラノベが1番好きだ? まさか
ラノベ読んでないって事は無いよな?」

「俺も一応ラノベは読んでたけど何が一番って言われると少し悩むな…どうして急に？」

「俺達はどうやら違ったラノベで人生観が変わったというか、好きなラノベによつて性格が違うらしい。ちなみに俺は『トートケーニヒ』がバイブルだ！」

「へえ、そうなんだ、トートケーニヒは俺も好き。異世界系のダークファンタジー代表と言つても過言じゃないよな！主人公が人外で決して人間の味方じゃない所や、周りの仲間達が優秀過ぎて内心焦つてるのも面白いよな。漫画やアニメにもなつてたし、そういう映画にもなるんだったよなあ。」

「そうなんだよ！あの味方には甘く、敵には無慈悲な所とか自分が思つてもないような自体に内心焦つても運良くチャンスにする所が好きで、特にあの圧倒的な軍事力で蹂躪するのは堪らない…」

「確かに分かる、熊重は何のラノベが好きなの？」

「俺は『召喚されし戦闘狂』だな。」

「あく懐かしい！トートケーニヒ程認知されてないし、なんなら結構マイナーだけど確かにあれは面白かったな。主人公の思考は絶対に善では無いけど悪と言いきれないし、主人公が関わった全てに良い意味でも悪い意味でも多大な影響を与えてる所とか人の扱いが上手い所や、なんといつても全ての武術に長けてる所がカッコイイよな。」

「その通り、自分のしつかりした芯のある価値観があるが他人の価値観を否定しなかったり、それでいて価値観を突き通すには殺し合いしか無く、命の奪い合いをあそこまで美しく且つ儚くそれでいて心が滾るものと教えてくれたラノベはあの本しか無かった……」

2人の語るラノベは俺の世界にもある本でどちらも内容は俺の知っている通りなようだ。

「それで優はどうしてここに？」

「俺の奴隷達を養う為というか、そんな感じかな。」

「あーなるほど、確かに俺達のいた所でその数の奴隷を養うのは無理だな。」

「そうなんだよ、将輝と熊重は？」

「俺はトートケーニヒみたいなのがしたいからだな！」

「俺も召喚されし戦闘狂に感化されて、儚くも美しい命の奪い合いがしたいからな。」

「トートケーニヒと召喚されし戦闘狂みたいな事って小説通りの事をするの？」

「全く同じという訳じゃないけどな、俺はもうしたい事をしたし更なる強さを求めて力フに連れてきてもらったんだが……そうだ、見てみるか？」

そう言つて将輝は何かの道具を取り出した。

「これは？」

「記録保存の魔道具だよ、まあ見てみる。」

「これは……」

そこに映し出された映像は

?—————?

26. 将輝の世界

「あーあー、初めまして俺は今日より魔王国の王になるゼロストロだ。今全世界の電波をジャックさせてもらった、俺はここより全人類に宣戦布告を行うー!」

「な、なんだこれは!?!おい! 一体どうなってる!」

「全世界の電波をジャック? こいつは何を言っている。」

「声だけでは判断しかねるが、若造の様だな。新手のテロか? この放送元を特定しろ」

「何これ? 何かのイベント?」

「全世界の電波をジャック(笑) 言語の壁はどうするんだよこいつ(笑)」

「あれ自作の仮面か?(笑) 厨二病キター!」

「おお、いかにもな反応で面白いな。俺は今南緯37. 5794130, 西経139. 3945310に隆起させた大陸から放送している、今から1ヶ月後に日本・アメリカ・ロシア・中国・イギリスに一斉攻撃を仕掛けます。それまでに各自戦闘準備をしていて下さい、それでは1ヶ月後楽しみにしています。」

プツッ

「はあく緊張したあ、これで大丈夫かなカフ？」

「ああ、翻訳魔法はちゃんと機能していたし、ちゃんと伝わったはずだよ。その証拠には
ら」

「中国からミサイルが飛来！迎撃を開始します！」

「ははは！あの国は流石だな、行動力は1番だ。宣戦布告した国にいきなりミサイルは
正解と言えば正解だよな」

「そうだね、まああんな物脅威でも何でもないけど。」

複数の飛竜が飛び立ちミサイルを撃ち落とす。

「これで少しは警戒してくれるかな？してくれないと困るけど。」

緊急国際会議にて

「今日集まってもらったのは他でもない昨日突如現れた魔王国を名乗るテロ集団による
宣戦布告についてだ。」

「なんなのだあれは！我々のミサイルがいつも簡単に撃ち落とされたぞ！」

「それにあの生物…空想上の伝説にあるドラゴンではないか？」

「馬鹿馬鹿しい、そんな物いるはずがなかるう。」

「ではあれは一体？」

「そんな事よりもあの敵性国家にどの様な対処をするべきか。」

「あのテロ集団を国と認めるのか!？」

「いや、そうではないが…」

「そこら辺にして下さい、今は我らが一丸となつてあのテロ集団を打ち倒す方法を探るのが目的です。」

「1ヶ月も待たずに各国で軍隊を集結させて攻めればいいでしょう。」

「異議なし。」

「少しよろしいでしょうか、我ら日本の自衛隊はあくまで自衛目的で存在していますのでこちらから攻撃を仕掛けるのは…」

「これだから日本は！お前らの国も狙われているんだぞ！」

「承知しています、ですのでまずは我らが交渉に出てもよろしいでしょうか？」

「交渉？なにを交渉しようと言うのだ。」

「使者を送り出し相手の求めている物を探しつつ相手の油断を誘います、上手くいけば丸め込む事が出来るかもしれません。そうでなくともこちらが攻撃する口実が欲しいのです」

「ふむ、まあ我らに害はないから好きにするといい。だが使者が人質に取られたとしても遠慮なく攻撃させてもらうぞ？」

「覚悟の上です。」

「では各国戦争の準備、そして日本は仮称魔王国に使者を送り出し交渉するように。次に計画の詳細を…」

国際会議の一部始終を傍観し終えて俺は笑い出す。

「はははっ！ いいねいいね！ 各国はやる気満々だ、日本は流石平和主義といふかなんというか…うーん、どうしようか。」

「日本を最後に攻める計画だったけど最初に攻める？」

「いや…俺の母国だからな、最後にするけど…そうだ！ 交渉で日本だけは攻撃しない様に纏めるか！ そしたら各国から日本が非難されるだろうなあ」

「将輝…君は母国が好きなのか嫌いなのかどっちなんだい。」

「え？ 好きでも嫌いでもないぞ、日本人は愛国心とか薄いからな。まあ人によるだろうけど」

「ふうん、とりあえず侵略する軍は俺が生み出した魔獣達でいいね？ 各指揮は指揮特化のゴーレムに任せて。」

「おう、それでお願ひ。すまん何もかもカフに頼ってしまったて」

「いいよ、俺は面白い事が見たいし。軍事力は有り余ってるからね」

「俺が見たカフの軍団が全体の数%で聞いた時は流石に引いたわ、ほんとカフは何でも

「ありだよな。」

「ははっ何でもありではないけど、自分でも自己複製は有能だなと思うよ。おかげで次元渡りや星渡りが出来て幾らでも軍事力を増やす事が出来たからね」

今回使うカフの軍団の空きも量産しているカフの複製達によつてあつという間に補充された、なんなら毎秒何処かの次元や星で軍事拡大しているらしい。どうやって維持しているんだか

「でも、もつと危機感を持つてほしいから各国にそれぞれ魔物を解き放とうか。そうだなあ：日本にはリッチ小隊を、アメリカには死デスを運ぶ獵犬ハウンドを各州バラバラに5体、中国には諸侯の屍エミネント・キョンシーを1体、ロシアには冷気の翼竜コールド・ワイバーンを中隊、イギリスには山羊頭フオモール巨人を5小隊。首都を含む地域に配置してくれ、好きな様に暴れてくれて構わないという旨を伝えて。」

「ふむふむ、了解。比較的弱めな戦力をバラバラに配置するんだね？」

「ああ、あくまで危機感を持つてほしいだけだから下の上くらいで構わない。だがまあ、異世界の凶暴な魔物に慣れてないこの世界の国には丁度良いだろ。」

「ならデス・ハウンドは不味くない？あいつら肉体にも魂にも攻撃してくるから生身の人間には天敵だろうし、物理攻撃があんまり効果無いよ。」

「ああ、デス・ハウンドはちよつとしたパロディというか『トートケーニヒ』で出てくる、

そこまで強くないモンスターがたつた数体で廃都市にした物語をオマージュしたんだよ。ははっ楽しみだなあ、まあ爆炎とかはちゃんと効くし、もしかしたらミサイルの絨毯爆撃で倒せるかもな。」

「あの国に同情するよ…」

そう言いながらもカフは各連絡係に今伝えた魔物を各国へ解き放つ様伝えていた。

イギリスにて

「ば、化け物だあ!」

「なんだあれ!なんなんだあれ!」

「やつ山羊の顔した巨人!」

「いや!助けてぐぼえ!」グチャ…パキツ…

「「メ」エ」エ」エ」!」!」!」!」

ロシアにて

「ドラゴンだど!」

「はっ!モスクワ上空にて数体のドラゴンらしき生物が飛翔しており、国民や建築物にも被害が出ております!」

「一刻も早くそのドラゴンを撃ち落とすのだ!重火器の無制限使用を許可する!!」

「はっ!!」

「くそっ！あのテロ集団によるものか…？1ヶ月も待たずに攻撃してきてるではないか！！」

中国にて

「お父さんやめて！痛い！いだい！！いゝたゝいゝ！！」

「あなたやめて！我が子を食べないで！！」

「ウゝカゝアゝアゝ！！」

「誰か助けてー！！」

「こいつらに噛まれるとゾンビになっちまうぞ！」

「頭を潰しても動いてくる！どうにかしてくれえええ！」

「くくく、さあ我が子らよ。もつと喰いもつと増えよ！ああ、この様な褒美を下賜して下さったカフ様に更なる忠誠を！！カフ様に喜んでもらえる様もつと我が子らを増やさなくては…！！」

アメリカにて

「タイムズスクエア陥落！生存者がいる確率は絶望的かと！」

「くそ！やりやがったな糞犬め！これ以上被害を拡大させない為にも全軍をもつてあの化け物を必殺するのだ！！」

「ワシントンにも同種と思われる化け物が出現！被害が加速度的に上がっています！」

「なんだと!?こんな化け物を2体も相手してられんぞ!!」

「ひっ!に、2体所ではありません…アラスカやテキサス、ラスベガスにも出現したとの報告が…!」

「なんだそれは…ははは、ただでさえ並の銃器が効かず、どれだけ防御を固めていても外傷を与えずに人を殺せる化け物なのにそれが5体…?我々は神の怒りを目の当たりしているのか?」

日本にて

「皆さん!速やかに避難してください!!」

「おい!早く退けよ!」

「ママア!ママア!!」

「もうすぐそこまで来ているぞお!」

ズガアン!バゴオン!ズガガガガ!

「物理障壁、そんな物じゃ我らの守りは切り抜けられんぞ。」

「火球」

「ファイアーボール
火球」

「てっ撤退撤退!一時撤退する!ビルが崩れるぞおお!!」

ズズウウウン…

魔王国玉座にて

「ははははは！見ろよ、各国どこも手に追えてないぜ！あつ中国なんて混乱に乗じて内乱まで起こしてるし！面白すぎだろ」

「これは予想以上に効果覲面だね。」

「ははは、はあ…そうだな。このままどこかの国が滅んでしまえばいい勢いだけど目的は滅ぼす事じゃないからな、1週間後にまだ魔物達が生きてたら呼び戻すか。」

「1週間も放置するんだ…この世界の人達は可哀想だね。」

それから1週間

「世界各国で突如発生した災害級モンスター事変から1週間が経ちました。大暴れしていたモンスターは唐突に消え、しかし決して消えない傷跡だけが世界各地に残されました。各国の首相はこれを大虐殺テロ集団「魔王国」によるものだと声明を出し、テロ集団による虐殺を止める対策に追われています。果たして我々に安寧は訪れるのでしょうか？次のニュースです…」

ぷちっ

「これで世界中の人達は危機感を持っただろうな、日本のリッチとロシアのゴールド・ワイバーン、イギリスのフォモール、アメリカのデス・ハウンドの1体は撃破されたが残りは案の定手に負えなかったみたいだな。」

「エミネント・キョンシーの眷族無限感染増殖は時間が経つほどに手が負えなくなるか

らね、デス・ハウンドの方は1体倒すのに軍の殆どの力を割いちやっただけで残りの4体はほぼ放置状態だったよ。」

「おかげで今回の襲撃で出した魔物達は伝説として語り継がれるんだろ、ははっあいつらが俺らの中で下から数える方が早い弱さだと知ったらどんな顔するんだろっ！」

「さあね、少なくとも青ざめたりはするんじゃないかな。それよりも後2週間もしない内に日本から使節団が来るんだから会談に向けて計画を立てようよ。」

「対面で話し合うのは苦手だけど、やるしかないか…」

日本の使節団に向けての打ち合わせが始まる。

全世界緊急首脳会議にて

「この会議で集まってもらったのは魔王国から指名された各国の首相だけで無く、全世界の国々で様々な分野の専門家達も招待させて頂いた。奴らが全人類を滅ぼす可能性が高いからだ、まあ参加しに来ていない国もあるが…我々は今こそ手を取り合わなければいけない!どうか皆の意見を聞かせて欲しい。」

「意見も何も今すぐ核を撃ち込むべきだ!幸いあのテロ集団の本拠地は他国と距離が空いている孤島だ!!あいつらにこれ以上好き勝手させてたまるものか!」

「そーだ!そーだ!」

「多数の同意した声が怒りとも焦りとも似つかない声で上げられる。

「しかし、あそこに核を打つとなると今後太平洋の魚が汚染されてしまう可能性が…」

「今そんな事言っている場合か！」

「あんな化け物共を生かしている方が問題だ！」

「むしろ何故核を打たないんだ！」

「静粛に！…確かに核を打つのは名案かもしれませんが、もし相手に核が効かなければ我々だけが被害を受けます。それをお考えで？」

「か、核が効かない生物などいるもんか！それに対応する事など…」

「中国が放ったミサイルがいつも容易く撃墜されたのをお忘れですか？」

「ぐう…なっならばどうすれば良いのだ!!」

「それを決める会議なのです。」

「失礼します、我々日本は1週間後に魔王国と呼ばれる孤島に自衛隊と使節団を派遣する予定です、無駄死にするかもしれませんが使節団達は既に覚悟が決まっている為彼らを囮にしてもらっても結構です。」

「日本人特有の犠牲精神ですか…語り継がれてきたいつぞやの特攻隊を彷彿させますな。」

「かけがえの無いものを守る為です。」

「日本の覚悟は分かりました、後は我々の覚悟を決めるときです。日本、ロシア、イギリス、それにアメリカが倒したモンスター達を解剖し情報を共有、必要な資材も惜しみなく提供し合い奴らに有効な武器を製造したいと思えますがどうでしょう?」

「良い案だと思うが、それについて問題が。」

「どうしましたアレクサンドル大統領。」

「我々が倒したドラゴンだが、回収から2日で跡形も無く消えてしまったのだ。」

「な!?!それはどういう意味ですか!他国に奪われたという事ですか!?!」

「いや、文字通り消えてしまったんだよ。嚴重に保管しておいたはずだが…研究の為に死骸に触れていた者によると死体は黒い煙を出しながら蒸発していき、遂には骨すら残さず消えてしまったそうさ。まるでこちらに研究させないかの様に」

「そんな…それでは我々が倒した山羊頭共も…」

敵の余りの用意周到さに誰も沈黙してしまう。

「…しかしまだ負けた訳ではない。」

「そうだ…!重火器が効いているなら希望はまだある!!」

「超超超上空からの水素爆弾の投下はどうだ?」

「なら全方位からの波状攻撃なども…」

絶望の中から僅かな希望を見つけようと人々は丸々1日必死に意見を挙げて話し合

う、それを傍観している者がいるとも知らずに…。